

94
199

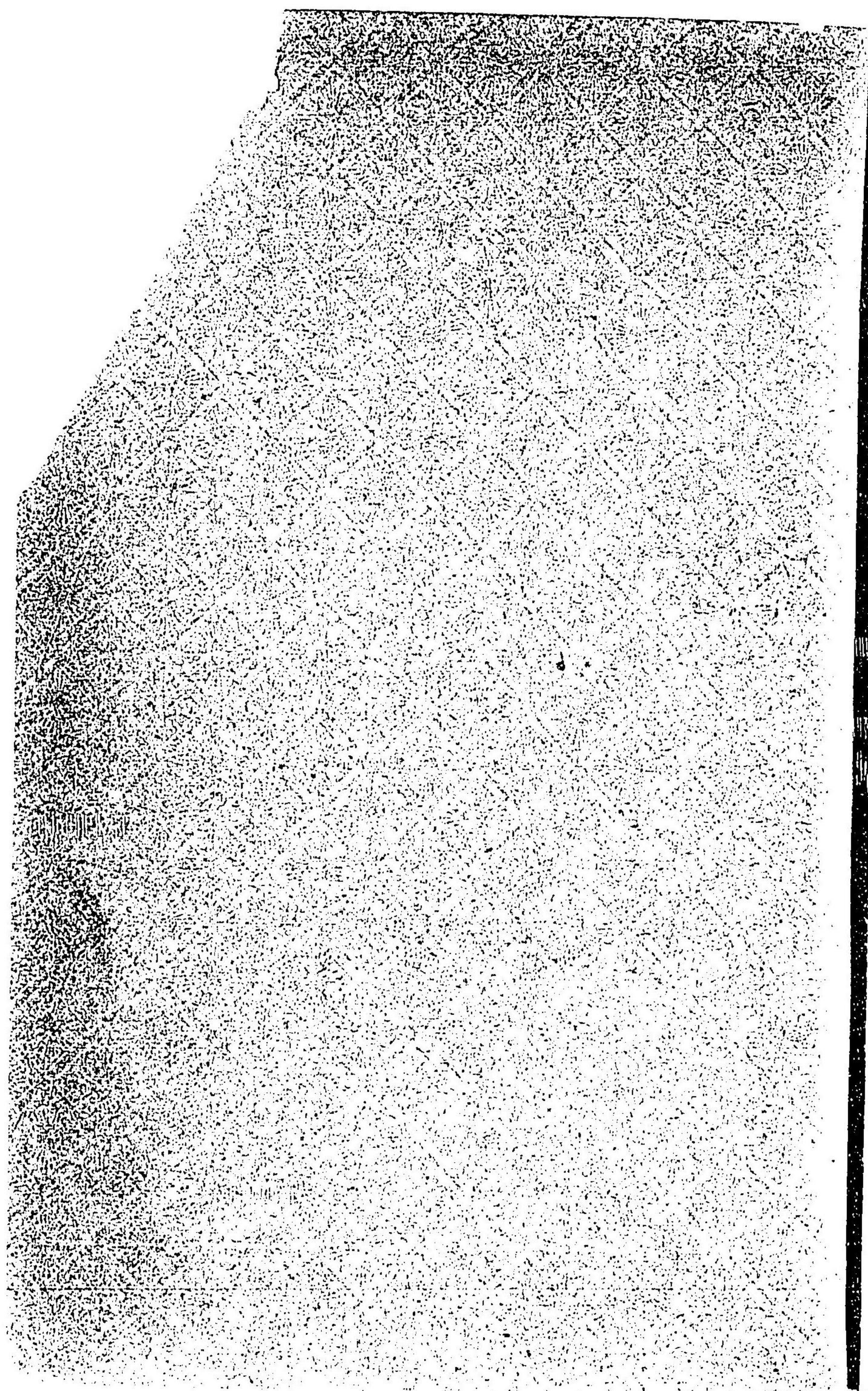
俳句入門叢書

第五編

内藤鳴雪著

秋
冬
芭蕉俳句評釋

東京 大學館發兌





是非共該評釋を擔當されい。余曰く、一應御尤、然し僕は淺學
 寡聞、且多忙生である。「俳句獨習」の如き自己の意見は單に自己
 の胸臆丈を説話すれば足る譯だが、他人の句解となると、其傳紀
 を知らねばならぬ、其句關係の故事も捜さねばならぬ、是れ僕が
 力の及ばぬ所である。残念ながら御辭退申さう。蠟骨君は隙さず
 又曰く、其辯解は百も承知、拙者と雖も貴老が力の及ばぬ所を強

著 28
 純文
 明証
 37
 6
 37
 内交

ひは致さぬ。唯該評釋も「俳句獨習」と同じく、單に胸臆丈を説話せざるれば好いのだ。それで蕉翁の句の純文學的と否とは分かる筈。若し分からぬとならば、淺學寡聞の貴老が何故個様なる大言を吐かれた歟、それが不審だ。殊に蕉翁の傳紀や其句關係の故事は從來諸家の註解に於て既に盡して居る。此上貴老を煩はす必要はない。又筆記の如きは例に依り拙者が仕らう、如何で御座ると。余は暫く打案じたが、決然答へて曰く、諾。是れ此書を著すことになつた所以である。

一此書は専ら俳諧一葉集發句の全卷を評釋したのであるが、其「寛文延寶天和年中」及「考證」の句を除いた。前者は所謂正風以前の句に係るが故、後者は眞偽未だ確ならざるが故である。

一評釋の目的は「俳句獨習」に伴ひ、主として初學者の爲めに純文學的俳句を示授するに在るのだから、やく造詣したる人より見ば煩瑣不要と感ずる點も多からう。是れ詮方がない。

一自己の胸臆を説話するとは云へ、句に依り其傳紀故事を知らねば解釋の出來ぬものもある。此場合は「芭蕉翁句解大成」等から智識を借りた。而して猶不了の事は疑問を存して同人の教を仰ぐこととした。

一鼠骨君の筆記後尙訂正を要するものは余自ら筆を入れ、隨て文章の蕪雜支離を致した處も少くない。是れは鼠骨君の爲め特に辯明して置く。

冬秋
芭蕉俳句評釋

内藤 鳴雪述

秋の部

鳴海眺望

初秋や海も青田の一みどり

鳴海の驛に於て初秋に海を望み其の景色を叙した句で、折節初秋の氣候だから初秋やと言ひ、海の色も海岸にある春田の色も共に一つの緑色を呈してゐる、と言ふたのである。即ち海も青田もと言ふ可きを却つて青田のとしたのは唯だ言葉の上のあやたるに過ぎない。又た一みどりといふ緑をば重もに青田の方へかけてゐるが同時に又た海の方へもかゝるのである。一は雙方一様といふ位の意味。

初秋やたぐみ乍らの蚊帳の襪

初秋の客觀に人事の主觀を交へて着想としてゐる句で、氣候は早や初秋に入つた、さうして折ふし日も暮れ夜に入つたので稍々冷氣を覺ゆる、其處で未だ釣らずに疊んである儘の蚊帳を夜着として一寸身に掩ひて其處へ打臥したといふので、初秋の霽に暫らく假寢したといふ趣である。若し秋が深くは寒くて假寢などは出來ぬが、初秋だから氣輕に出來るのだ、併し夏の夜とはちがひ少々冷氣を覺ゆるから蚊帳を夜着にしたといふので、善く初秋の心持が現れてゐる句ぢや。

直江津にて

文月や六日も常の夜には似ず

前書の直江津は俳句とは何の關係も持つてゐぬ、唯だ直江津に泊り

あはせて七月六日に會つて此句を作つたのだからその地名をいつたゞけの事ぢや。文月は七月の事で、やといふは茲處では文月はといふと同じ心持で、唯だ調子の爲めにやといふたに過ぎぬ。折ふし文月の六日であつたが、其の六日も常の夜には似ず何となく一種違つた心持がすると言ふので、ツマリ明くれば七日となり七夕の夜となり、初秋に於ては一の趣味ある夜であつて、牽牛織女を祭つたりする面白い夜である、其夜が早や明晩ぢやと思へば六日の今晚も心ときめきて常の夜のやうには思はれぬと興じたのである。

出雲崎にて

荒海や佐渡に横たふ天の川

前句と異つてこの前書は此句に大關係を持つてゐる。即ち北海に瀕する土地で、其處から佐渡を眺望した大なる景色を叙したのであ

る。折ふし夜で、北海の秋の事なれば、波高く海上騒がしく凄しい勢であるから荒海やとうたひ出で、其の向ふを望むと佐渡の島が横はつてゐる。大空には天の川がキラ／＼として荒海の上を渡つて佐渡の島まで續いてゐる。尙詳言すると、自己の立場と向ふの島との間に、下には荒海吼え、上には天河が横はつてゐるといふので、此句を誦すると自ら其地にあつて此の豪壯雄大な景色を見よ、如く感ぜられる。且又此句は斯様な雄大な景色に應ずべく言葉も頗る手丈夫に言ひこなしてある。着想とそれを言あらはす言葉とは互ひに一致するを要するは常に屢々説く所であるが、蕉芭翁は既に斯様な事にもよう注意して充分に工夫を凝らしてゐるのは實に感服の至で、此句の如きは翁の集中最秀逸に屬す可き句である。

尙一言す可きは、横たふといふ語は横たへたといふ意であるから、

此句の場合天の川より言へば宜しく横たはるとす可き筈である。即ち横たふは他の者があつて天の川を横たへた時に言ふので、天の川自身が横はつてゐる場合には是非共横たはるとせずばならぬ。併し右文法を正確にせん爲めに横たはるとせば句調にたるみを生じて緊縮しない。其處で斯かる場合には自他の區別を離れ文法に拘泥せず故らに横たふとして調子を強くさせたので、是等は初心者が心得べき俳句特有の文法と言ふ可きである。前卷にはとゞぎす聲横たふや水の上といふ句があつたが、彼是参照せば此間の消息を解する事が出来るであらう。

合歡の木の葉こしもいごへ星のかげ

此句は前の句とは全く正反對で、至つて繊細にして婉麗な事柄を材料としてゐるから其言葉も亦た頗る柔かに出來てゐる。恰かも前句

は時代物の修羅場の如く此句は世話物の濡事の場の如き感がある。合歡の木は葉もなよ／＼してゐれば花もやさしいもので、且つ眠るといふより男女合歡の名さへ得てゐる木である。其合歡の木の葉ごしになつて星のかげがさしゐるといふ處を、木は合歡、さす影は星といふ何れもやさしいものであるから、多少擬人的にして、星さんが合歡の木の葉にさ／＼へられてそれをいとひ顔である、まことにとしばいと言つて全體の情致を現はしたのである。勿論星がいとふといふやうなことが實際にある筈もなく唯だ理想的にやさし味を現したのみであるから、斯くいふと同時に寧ろいとほのみならず、それを作者も心地よく打ち眺めて居るのぢや。又た此星は句の全體より察するに、矢張り初秋の七夕星の心持と見られる。

素堂の母七十あまり七としの秋七月七日に壽するに萬葉の七種をもて題とす是につらなるもの七人此結縁にふれて各々又七叟の齡にならばむ

七株の萩の手本や星の秋

山口素堂の母七十七歳の秋七月七日に七十七歳の壽即ち年賀をなすとて俳會を催し、萬葉集の秋の七種を以つて俳題とした。此席に連り座するものが丁度七人であるが、此の七人も此の結縁によりて各亦支那の昔しの七叟の齡にならつて長生をする事が出来るであらうと七づくしに洒落れて前書を置いた。七叟とは白樂天が尙齒會の席に七十以上の老人を集へた故事である。

句の意味は七株の萩を寫してある書手本がある、それを星の眺めに入る秋に於て見たといふので、星の秋即ち七月七日の七夕と七株の

たのである。表面は唯だそれ丈けで、川水高く岸に岩あり其上に星が光つてゐるといふ一の景色を擬人法に叙したに過ぎぬのであるが、裏面には雨星といふ名にちなみ、其人を星と見立て、其人は既に此世を去り白雲郷の客となりて今頃は空のあなたに星の如く住み、出水を避くるやうに世俗の汚濁をさけて安らげく旅寝でもしてゐる事であらう、といふ意をほのめかしてゐる。一本には七夕の夜風雨がして偶々小野の小町の歌を吟ずる人あり、それを題として作つたと前書があるさうな。而して岩の上の旅寝とは小町の歌の詞を取つたものとして居る。此方ぢやと星は全く七夕で天の川で出合ふ時の事を思ひ遣つた事となるのぢや。弔詞ではない。

野童亭にて

七夕や秋を定むるはじめの夜

野童亭で讀んだといふ前書で、句には餘り關係はない前書である。

七夕の夜は秋を定めてしまふ最初の夜ぢや、此夜よりして秋が定まり次第に秋らしくなる、七夕以前は秋とは言へ尙ほ夏けしきもあつたが、此の七夕の夜に至つて景色も人心も初めて秋に決まつたといふに過ぎぬ。前卷春の部に「春もやゝ景色とゞのふ月と梅」といふ句があつたと略ぼ同じ筆法で、彼れは客觀の景色が強く、これは主觀の人心が強くなつてゐる。

當麻寺にて

僧朝かほいく死かへる法の松

大和の當麻寺で作つた句。

當麻寺には一の古大松があつて、それを芭蕉翁が見て此句を作つたと或書には前書が添へてある。其の寺内の松を見て此想が浮んだの

で、松に比して短い齡のものを二つ配合して此句の着想としたのである。即ち其の場合の季節に於て尤も短かい朝顔の齡と、今一つは寺であるから僧の齡とを思ひよせ、僧や朝顔が死かへりくして何度となく生滅してゐる、其間に此松は御法の力によつて飽迄も長生してゐる、といふので、反言すると、此の一大古松の生涯に僧と朝顔は幾度死んで幾度生れ變つたであらうか、誠に難有い尊い大いなる松であると言ふたのである。蓋し佛説に輪廻といふ所より或世には朝顔と生れ又た或世には僧と生れいろく生れ變つてゐる間に松獨り依然として常住不滅の趣があるといふ觀念を浮べたのもあらう。併し斯く見れば或は理窟くさく佛説くさい嫌もあれど着想の基く所をあまりに深くさぐらずに、單だ俳的滑稽趣味を述べたものぢやとせば詩趣必ずしも乏しくはない。且つや朝かほと僧と並べたの

は一寸奇想にして面白味多く、それが幾死かへるといふも多少の興あるに於ては強ひて之を枯淡にして佛道くさくと概論する事は出来ぬ。寧ろ言説のみを佛道より藉り來りしものと見るかた至當である。况んや眞面目の佛教談なりとせば佛法僧てふ三寶の一なる僧を斯く輕々しく朝顔と配し松にも若かざるものとする事は芭蕉翁として爲す可き所に非ざるをやである。飽迄も文學的の作品として翁も此句を吐いたと見ねばならぬ。

朝顔の花になきゆく蚊のよわり

これは秋の朝けしきで、庭の向ふに朝顔の花が咲いてゐる、今迄で家の内にあつて人を螫した蚊が夜明になつて、家を出て、庭の朝顔の花の方へ鳴きながら行く、其さまが今迄人を螫した勇氣も何處へやら、秋の朝寒に聲も姿も弱々しくなつてゐると言つたのである。

鳴き行くといふ所修辭頗る巧みにして景情ともによく現されてゐる。

嵐雪か書に賛望みければ

朝顔は下手の書くさへあはれなり

嵐雪が書とは其自書であらう。書は十分にわからぬが兎角朝顔はあつたと見ゆる。其の書に對して又筆者に對して一寸軽く戯れたので、朝顔は如何にもあはれな花ぢや、下手が書いたのさへも矢張あはれに見らるゝと言つたに過ぎぬ。但だあはれは悲みあはれむの意にあらで、愛でてかあいく思ふ方のあはれである。

更科行首途

朝顔は酒もりしらぬさかりかな

信州更科へ旅立つ其の首途の時の句。今より旅立つといふのである

から是非送別の爲め知己門人など集まりて、酒を置いて打ち語らひ、別れを惜んだのと見える。其時に芭蕉翁も一杯機嫌かなんかで興に乗じて作つたのらしい。

送別會の庭には朝顔が咲いてゐる、誠に美しく眺められる。我れは今より發途して遠き旅路に赴かうとし、人々と共に別盃を酌んでゐるのに、彼の花は聊かも我れに關せず、送別の酒もりも知らず顔に美しく咲いてゐる、可愛い奴であるわいと即景を打興じたに過ぎぬ。

閉關

朝顔やひるは鎖おろす門の垣

閉關とは自分の門を鎖して靜居するといふ意ぢや。此句には別に閉關の説といふ文も添うてゐるが、こゝには略された。

朝顔が垣根にさいてゐる、其の奥に庵があつて、庵に入る可き垣根

の柴折戸は晝であるに鎖が下りてゐるといふ主として客觀的のけしきぢや。文字上から更に解すると、晝であるに戸を閉ぢた門がある、其の門の垣根に朝顔が咲いてゐるといふのを言葉を顛倒して斯様に叙したのである。實に美しい朝顔が咲いて、其の門には訪ふ人もく寂寞たる景色が目には浮ぶやうで、佗人の住居をよく現してゐる。言葉の上に就て一言すべきは、ここに晝はと言つたのは、元來門は夜鎖するのであるのを、晝も鎖すといふたのである。其の晝もといふを特に晝はといた爲めに世に遠かる爲め夜よりも寧ろ晝を主として閉すといふ心持になり愈々以つて佗人の境界がよく現れるやうになつた。僅かの事であり乍ら趣味に於て大相違を來すから、初心者は常に此邊に注意して一字一句苟もせぬ心掛が必要ぢや。

朝顔やこれも亦我友ならず

朝顔はこれも自分の友ではない、我友にする事の出来ぬ花ぢやといふたので、朝顔の餘りに早朝にさくから老いて萬事物うい自分は早起が困難で、美しい朝顔を友にする事も出来ぬといふ位の戯れであらう。此外世上の人に知己なしといふ餘意のあることは勿論。

和其角螢夢句

朝顔に我はめし喰ふ男かな

其角の「草の戸に我は夢喰ふ螢かな」といふ句がある、其句に芭蕉翁が和して此句を作つたのである。

朝顔の花に對して自分は飯をくふ男であるといふので、朝顔は丁度朝めし時分だから斯く無難作に武骨らしく滑稽味を帯びて言放つたに過ぎぬ。其角の句の方は理窟臭いが此句は却つて一種の趣味がある。又何丸は此句を以て其角の爲め酒を戒めた句ぢやとしてゐるが

それぢやと見ても矢張滑稽的諷諭に過ぎぬ。

丸岡の天龍寺を出るとき金澤の北枝と別に望みて

物書いて扇ひきさくわかれかな

丸岡といふ所の天龍寺といふ寺を出る時に金澤の人なる北枝といふに別かれる場合に臨んで作つたといふ前書。望は臨と書く可きである。芭蕉翁も兎角斯様な間違ひをやつてゐる。

別に臨みて扇へ字を書いて、それを引裂て、留る人に渡して去つた、といふだけの事で、其場合の事實であらう。如何にも氣輕で心地よい句ぢや。扇は夏季ぢやが引裂くといふ處より捨扇と見て秋季へ入れたのであらう。

ある草庵にいきなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

前書は説明する迄もない。

秋が涼しくて誠によい心持ちや、皆々勝手に瓜茄子をむいて喰ふがよい、手當り次第むいて喰はうぢやないかと、いつたので、或は茄子は瓜のやうに手ツ取り早く喰へぬなごど理窟いふ者があるかも知れぬが、野暮の論として辯ずるにも及ばぬ。

栗津の庵にて残暑の心を

ひや／＼と壁をふまへて晝寝かな

江州栗津の無名庵に居つた頃の句と見ゆる。

足を伸ばすと壁にとゞく、其の壁は冷くどつめたくてよい氣持ちや、それをふまへたまゝで晝寝をする事ぢやといふたので、自墮落に心のくつろいだ他人の様がよくあらはれて居る。且つあついから自然寢ながら足をあげて壁へやつた、其壁は流石に秋の氣を帯てつめた

かつたといふ残暑の心持もよく書き出されてゐる。

寄李下

稻妻を手にごるやみの紙燭かな

李下といふ男にやつた句。

夜分に紙燭をして闇の椽へ立出ると、折から稻妻が光つた、燭を持つた人は手で稻妻を捕へたやうな氣持がしたと面白く叙したので、唯だ闇に立つ人に稻妻がしたのみならば手に取るとは言へないが、紙燭を持つてゐた爲め稻妻の光つたのが紙燭にさしたのを取ると誇張して言つたのであらう。尤も自分の持つてゐる紙燭を振舞はじて其光りが恰かも稻妻の如くであると與じたのちやと解する事も出来るけれど、それは餘りに殺風景な景色になるから矢張り前のやうに解するが穩當であらうと思ふ。

宿敦賀

あの雲は稻妻をまつたよりかな

越前の敦賀に宿した時の句といふ前書で、句は特別に敦賀に關係しては居ぬ。

秋の夕ぐれの景色と見え、向ふを見るとあやしき夕雲がある、ア、アノ雲は今する稻妻を待つてゐる様がある、キツト稻妻が又するにちがひない、全く彼の雲こそは稻妻を人に知らせる便りをして居るのちやと打與じたので、實に秋の夕ぐれの景色がよく現されてゐる。

或智識ののたまはく、なま禪は大疵の基とかやいと

有がたくて

稻妻にさくらぬ人の尊さよ

或る名僧智識が生悟りの禪學は大疵を仕出來す基ぢやといはれた

が、其言葉は誠に道理至極難有い事ぢやといふ前書。稻妻がしきりにする、それに頓着もせず一切萬事氣の付かぬ顔である人は尊い事ぢやといふたので、稻妻に對して悟らぬ人は大悟轍底の人なので、普通の大悟せぬ人は却つて稻妻が早く目に入り氣がつくのである。因て稻妻にも氣がつかず少しも悟らぬやうな人は尊い事ぢや、といつて、反對に早悟り生まかじりの卑むべきことを現はしたのであらう。併し是れも前に屢々言ふ如く、悟道とか迷ひとか禪の熟不熟などを強く考へず、唯だ輕ろく題にかなはず可く言ふて、主に文學的に興じて作つたと見るがよいのぢや。

稻妻や闇の方ゆく五位の聲

稻妻かする、闇の方へ五位驚がないて行くといふ一の客觀の景を叙したので、稻妻のさびしく物すごき景色がよく現れてゐる。

本間主馬か館に骸骨どもの笛鼓をかまへて能する所を畫いて舞臺の型にかけたりまことに生前のたはふれなとか此遊びに異ならむやかの欄腰を枕として終に夢うつゝをわかたさるものも唯此生前を示さるゝもの也

稻妻や顔の所かすゝきの穂

本間主馬は能樂師であつたさうな、其人の家に數多の骸骨が笛や太鼓をかまへて能をやつてゐる畫をかいて能舞臺の壁へかけてある、まことに此の畫の通りで人間の戯れは皆な骸骨が遊んでゐると同様ぢや、彼の如何なる美人でも皮一重の下は骸骨であるといふことも知らずに其膝などを枕としてさくらないで歡樂してゐる諸々の人も皆なこの通りぢやと示したものであるといふのが前書の意。稻妻の顔のあたりが丁度芒の穂の所ぢやと、漠然と言つてゐる。

稻妻に顔のある筈はないが、稻妻即ち妻といふ所より暫く人と見立て、光つた全體の或一部分が顔の所であらうと見て、其顔は芒の穂のあたりであると言つたのである。ツマリ漠然たる所が此句の着想の主眼で、無形にして取止めない稻妻を有形の如くに言つたのである。それを細かく分解して見ようとするは却つて此句の趣味を損ずる事と思ふ。芭蕉翁の事柄や場合により種々の想をかまへ且つ言葉を變化する所は實に非凡な力量である。

若し又た強ひて前書にかなふやうに説くと一面に稻妻がしてゐて、傍らに骸骨がある、其の骸骨の顔の所に芒の穂があるとも解せらるるが、かくすれば顔の字が如何にも突然にして寧ろ面白くなるから矢張り前條の如く漠然と解して置くがよからう。

よし野西行庵にて

露とくくく試みに浮世すくかはや

芳野にとくくくの清水といふのがあつて西行法師の古蹟となつてゐる。其處での句と見ゆる。

露がとくくくと落つる、其露で試みに面倒な五月蠅い浮世を一洗して見だいのちや、といふたので古人の西行の皎潔な人物に思ひよせて自己の懐をのべ半ば口合ひを言つて一時の興をやつたのである。若し水とくくくならば何等の面白味もないが、露とくくくとした爲め一種の光景を現して趣味を深からしめて居る。

畫 贊

西行の草鞋もかゝれ松の露

これは多分松の畫であつたので、それに趣向をつけて斯様に言つたのであらう。露のしたゝる如きが松立つてゐるが、此の松へ西行の

草鞋でもかゝつたら一層面白いであらうといふたので、或いは西行の草鞋かけ松といふのが何處かにあるのかも知らぬが、それがなくとも唯だ松の露の涼く清き處より高潔洒脱なる西行を取合せて打ち興じたと見てよい。否、其方が一層よい。

曾良に別る

けふよりや書付消さむ笠の露

曾良と共に奥の細道の旅をして越前に来て曾良にわかれた時の句である。

旅をする者は笠に同行幾人など書く、芭蕉翁も曾良と共に同行二人で今日迄は旅して来たが、是れよりは一人になるから其字を消さぬやならぬ、折から笠に露が置いてゐるから、幸ひ其の露で消さうよと、氣輕に言つたので如何にも巧みに出来てゐる。

二見の浦にて

硯かご拾ふやくほき石の露

伊勢二見浦で作つたといふ句。

二見の浦を歩行いてゐると、一寸見た所硯のやうな物がある。これは硯だよと手に拾ひあげて見ると、全く中間な石で、凹みに露がたまつてゐるのであつた、といふので即事即興でもあらう。氣輕に出て、景色が如何にも清らかで淡く、且つ興味がある。尤も西行に何か故事でもあるやうな解もあるが、それは引かぬ方が好い。

崑崙は遠く聞蓬萊方丈は仙の地なりまのあたり士峯地を拂つて蒼天をさへ日月の爲めに雲門を開くかどむかふ所みなおもてにして美景千變す詩人も句を盡さず才士文人も言を斷畫工も筆を捨てて走る若し貌姑射の

巧の神人ありて其詩をよくせむか其畫をよくせむか

雲霧の暫し百景を盡しけり

支那の崑崙山といふ名山は遠くから聞いてゐる、又た蓬萊だの方丈だのは仙人の居る地だといふ事を聞いて皆な難有い所だが見た事はない。然るに今ま目前に富士峯が地を拂つて蒼穹を撐へるかのやうに聳わてゐて、丁度其の状は日や月の爲めに雲の門を開いてやつてゐるやうに見ゆる。さうして士峯に對して打向く所は何れの方面より見るも悉く表面で、見る所は異なれど形は同じである上に、其の山の美しい形ちは日により時によつて千變萬化いろ／＼様々の風景になる。斯様な尊い見事な山であるから詩人といへど句を盡して充分にうたふ事出來ず。才子や文人も何と言つて咏ず可きか、殆んど口をつぐんで言葉を斷つてしまひ、又た畫工といへど兎ても此の大

景色は寫せぬと筆を捨てて走り逃げてしまふ。若し彼の莊子の所謂貌姑射の山の神人とかいふものがあつて、其人ならば或は富士の詩をよくし富士の畫を上手に書くかもしれぬが兎ても人間業では詩も畫も充分には出來まい、といふ前書である。さうして芭蕉翁は此の逃口上をして置き乍ら次の句を作つたので、なかく／＼するい親爺さんぢや。

富士山に雲や霧が掩ひかゝつて去來する。實に暫時の間に百もの景色を盡した。見てゐる間に百景にも變化した、而かもそれが暫時の間であるから豈に驚く可からざらんや、といふたに過ぎぬ。前置に逃げて置いたゞけで餘り面白い句と思へぬ。

霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き

霧時雨は霧の如く降る雨、其の雨の爲めに富士が見えぬ日であつた。

其日も亦た面白い事ぢや、と言つたので、富士の百景を見るのも面白いが又時としては斯様な天氣で富士が見えぬのも面白いと興じたのである。要するに詩人なるものは其時々々の興を面白くとするので、昨日は富士の見ゆるを面白とし、今日は又た見ぬそれを却つて面白いと興する、其心持は全く小供と同様で、現在をのみ興する、それが即ち詩人の詩人たる眞面目である。

秋海棠西瓜の色にさきにけり

秋海棠そのものふみの趣を叙したので、アノ秋海棠の花は恰かも西瓜のやうな、色で咲いてゐる事よ、と言つたのみで、似よつた他の物で形容したに過ぎぬ。西瓜の色とは態と下卑た食物を氣高い花に配合したので一寸滑稽じみて面しろい。尤も何丸は此二物同時に外國より渡り來つたものぢやから配合したのぢやと主張してゐる、或

は其關係もあらう。

玉川の水におほれそをみなへし

何處の玉川であるか分明しないが兎角玉川と名のある川がある、その川水の傍らに女郎花が咲いてゐる、それを見て此川を渡る人に溺れぬやうに氣をつけよといつたので、蓋し川の水嵩が増してども居たから此氣付をして、折ふし女郎花が咲いて居たから景色として下五へ言つて置いた位の事に過ぎぬ。尙女郎花の美しさに見ほれ、又はそれを折らんとして、誤て溺れてはならぬぞといふ心持もあるといへばあるであらう。若し更に一步を進めて、色に溺るゝ戒めとしたといふに至ては最早詩的解釋を通り越す事となる。

ひよろ／＼と尙ほ露けしや女花郎

是亦女郎花を暗に人間の女に擬して、其女郎花も最早末になつて色

もやゝあせた、さうしてひよろ／＼とよろめきつゝ立つては居れど
 尙ほ何處かに露けく仇めいた所が残つてゐる事よアノ女郎花は、と
 言ひ、暗に人間の既に花の盛りを過ぎて紅顔おとろへ身も弱りたる
 年頃乍らも天成の麗質は尙ほ名残を止めて何處やらに情を含んでゐ
 るといふ所に擬したので、小野小町が晩年のあはれをうたひたりと
 も見ゆるのである。

くすし何かしの像

のむら雨を背中におふて柴胡堀

くすしは醫師の事。

一人の男が藥にする柴胡を堀つてゐる、其背には村雨が降り灑いで
 ゐるといふ景色を誇張して雨を背中に負うてゐるといふたのであ
 る。想ふに此像は藥など堀つては居らず唯だ一の醫師の像に相違な

いが、醫師である所から折ふしの藥堀の季を持來つて斯様に興じた
 ので、題畫題像などは總て畫や像以上の趣を叙す可きは前にも度々
 言ふ如く是も亦た其一例である。

馬上の吟

道はたの木槿は馬に喰はれけり

何處か旅でもして荷馬でも借りて乗つて行つた時の吟咏であらう。
 此句は度々例に出る句で、嘗て俳句獨習に於ても詳論したが、此本
 の前書に馬上の吟とある上は愈以て文學的方面よりして解せねばな
 らぬ。即ち馬に乗つてはく／＼と村巷か何んかをやつて行くと、道
 の傍らに木槿が咲いてゐる、其花を馬が一寸バクついたといふの
 で、旅中の出來事を其儘に詠じたので、野や村の小徑などの景色
 として趣が深い。俗人は却つてこれを修身の誠として此の美を認め

ず、出過ぎると禍にかゝるから謙徳を守る可しと言つたのぢやなどいふは愚の極で、今更ら辯する迄もない事ぢや。

高田醫師細川青庵亭

藥欄にいつれの花を草枕

高田といふ地の醫者をしてゐる細川青庵といふ人の宅で作つたといふ前書。

いろ／＼の藥草を植ゑて埒をしてあるのを藥欄といふ。其の藥欄の内には秋の事なれば種々の花が咲いてゐる、其中で何れの花を旅の草枕として寝まらうか、サテも美しい種々の花のさいてゐる事よ、と言つたので、裏面には醫家に泊する所より、又た待遇のあつきより、斯く言つて謝する心持を含んでゐる。且つ此場合に於て實際其家に藥欄ありしか否やわからねど、單だ前庭の草花を見て、醫師の

宅なれば藥欄と言つた位の事であらう。

加賀國に入る

早稻の香やわけ入る右は有磯海

一面は早稻が出来てゐて、其の香りが其わたりに廣がつてゐる。其の香りをわけて行くと右の方に有磯海が見えて實に心持のよい景色であるわい、と言つたのである。尤も香には形ちなし、然るをわけ入るとは不穩當の如きも、其實は早稻の香がする其早稻田の中をわけて行くといふのを言葉にあやを持たせて斯様に言ひなし却つて一種の餘韻を含ませたのである。且稻田をわけ行くよりは香をわけ行くと言へば寧ろ其の境地の廣きを現し得て、蒼茫たる海に連なる大景がよく現されるのである。

小松といふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

茲處は何んと申す地かと人に聞けば、小松といふ所であるげな、さてもしほらしい名であるよ、其の名の因みの小松を吹いてゐる萩や芒も一入の眺めぢや、と言つたので、尤も萩や芒が直ちに小松を吹き動かすわけではないが萩なり芒なりに風があたつて揺動する様は風は見えずに萩や芒が獨り動くやうに見ゆる所から、詩的理想で直ちに萩芒が小松を吹くと言ひなしたのである。尙ほ詳解すると、しほらしい名ぢや小松といふ地は、此地には小松が多い、其の小松を萩や芒が吹動かして、野原一面に植物かそよいでゐる、と一面には名をしほらしく主觀に思ひ、一面は客觀に景色をしほらしく思ふ、其兩面を言表したので小松と吹との間に一の言葉が略されてゐると見れば可也。小松は加州の地名の由。

萩原や一夜は宿せ山の犬

萩原やは其處に萩の咲いて居る原があるからア、此の美しい萩原かなと咏嘆し、さて此の美しい萩原よ、一夜だけは宿してやつてもよいちやないか山の犬を、と云ふので、山の犬はアノ通り荒々しいものであるがセメテ一夜は宿をかしてやれ、と云ひ裏面には自分のやうな武骨者も萩原に寝かせよと旅寢のさまを興じたのであらう。又一解は行く手も山の犬が出て怖い、それ故此萩をあるじに宿りたい、といふ事としても好いやうぢやが少々詞が物足らぬ。

觀水亭

ぬれてゆく人もをかしゃ雨の萩

一面に萩が生ひてゐる、折ふし雨がふつてゐる、其中をわけ行く人は濡れる、ぬれ乍ら行く人も面白く興あるやうに思はれる事よ此の

雨中の萩原に於ては、といふので、一面に景色を叙し一面には其時の人の心持を叙したのである。

種の濱

浪の間や小貝にまじる萩の塵

磯邊には浪が打よせてゐる、其のよせてはかへす瞬間に見ると波の間には小貝が散在してゐる、それに萩の花が散つて塵のやうに混つてゐるといふので、如何にも繊細にして綺麗な有様が目の前にちらつく。

いろの濱

小萩ちれますすほの小貝小さかつき

殆んど前句と同じやうな趣を言葉をかへて言つたので、西行の歌にますうの小貝云々とあるより、又貝が小盃の代りをするより、小盃と

言ひしに過ぎず、即ち小萩の花よ散つてくれ、ますほの小貝の小盃で酒でも飲まうから、といふ位の事である。密萩と云ひ小貝と云ひ小盃と云ひ總て小さいやさしい物盡しで興をのべて居る。荒海や佐渡に横たふ天の川の句に比すると、彼れは怒りて夜叉の如く之は笑つて菩薩の如き感がある。ますほはますうともいつて眞赤といふに同じ。

畫讚

しら露をこほさぬ萩のうねり哉

萩はよわくとうねりくねりしてゐる物、其趣を着想として、うねつてゐながらも露をこぼさぬ位のうねり方である萩の木は、と萩を打見た儘の趣を叙したに過ぎぬ。幾分か人に擬した所もあつてやさしい餘情を含んでゐる。

ひこつ家に遊女も寝たり萩と月

安達原の一つ家とは昔しから名高い話し、鬼住むとは女をからかつて讀むだ和歌である、其邊から言葉を藉りて來たのでもあらうが、兎角芭蕉翁が奥の細道の旅中に、親しらず子しらずの難處も過ぎ越中に入つて宿を取つた時に、其宿に新潟の遊女が伊勢參宮の途だとかにて泊り合せた、其女共が芭蕉と一緒に道づれになつてくれと頼みたるに、芭蕉は自分は所々で滞留する事も多いからそれは出來ぬが人の行く儘に附て行きなさいと慰めて、己れも涙をこぼしたといふ事を日記に書いて居るから多分其時の句であらう。實際或る家に遊女も寝た、折ふし庭に萩あり空には月があつた、と即事をやつたのである。芭蕉翁としては一代の艶場である。唯一つ家といつたのが情致を深める詩的附會ぢや。

藤堂玄席子の庭なかばに作りしを見て

風いろやしごろに植ゑし庭の萩

藤堂玄席子は芭蕉翁の舊主家で、其人の庭が半ばだけ出來上つて完成しないのを見て咏じたといふ前書。

庭には萩が植ゑてあるが併し未だ充分に整つては居らず、しごろもごろと亂れてゐる、それに風が吹いて萩を動かしてゐるのが恰かも風の色ある如く見ゆると誇張してうたつたのである。或いは漢語の風色といふ熟語を和訓で柔げて用ひたものでもあるか。

敦賀守榮院

門に入れば蘇鐵に蘭の香ひかな

言葉の表面に現されてゐるだけの事で、守榮院の門へ這入ると、蘇鐵があつて、蘭の香もしてゐると言ふので、蘇鐵なり蘭なりは他の美しき草木と異なり。何れも清楚にして淋し味のあり且つ品致の高

いものであるから、頗る靜肅なる寺院の有様がよく現はされ、律宗か禪宗でもあらうと思はれる。

悦堂和尚の隱室にまねかれて

香を殘す蘭帳蘭のやごりかな

隱室とは和尚が既に住職を他に譲りて自分は隱居してゐる其部屋へ招かれて詠じたといふ前書。

蘭帳とは何か故事でもあるか詳しくわからぬが、想ふに蘭房といふが如く蘭の香りのする場所のことばりであらう。兎角和尚の隱室へ宿つた所より脱俗した形容を蘭帳とたゞへた位の事とで、其の蘭帳へ宿つて和尚と話すとお互の心事も符節を合し蘭の香ひの如く快く話しあつて一夜を明かしたといふ挨拶で、又易傳に同心之言其臭如蘭とある所より蘭を持出した次第もあらう。

茶店にて

蘭の香や蝶のつはさにたきものす

或茶店に休んだ時の句と見える。其茶店には蘭の花が咲いてゐる、或は鉢植にでもして置いてあつたのか。其の蘭の花のところへ蝶が来て遊んでゐる爲め、其蝶の羽へ蘭の香が移つて、恰も香を焚いて衣服を薰するやうに蝶のつばさへ焚物をすると言つたので、理想的に或る景致をあらはしたものでちや。併し餘り巧緻に過ぎて少しく不自然たるを免れぬ。

此解をして後一本を見れば、此句は長い前書付きで、茶店の妻の昔遊女なりし蝶といふ女に乞はれたまゝ與へた句ちやとしてある。左すれば蘭も蝶も實際あつたことせずとも好いので、總てが理想的に佳人を比喩して詠じたもので唯優しく床しい情趣を現はした丈である

のぢや。右の前書は宗因にも此茶店に同じやうな事があつた由をいひて一寸をかしい。

遊女の畫贊

枝ふりの日にくかはる芙蓉哉

芙蓉は花の犬なる割合に枝が細くて、満開の時には花の重みの爲め幹もたはくに成りあちこちへ傾く事がある、或いは雨の日、露しげき日にも其の雨露の爲めに傾く事がある。それを見て枝ふりが日毎日毎かはる芙蓉であるかなと言つて芙蓉其物の性質をあらはしたのぢや。而して裏面には日毎に客の替はる遊女の様をかすかに匂はしたのである。

きり雨の空を芙蓉の天氣哉

きりの如く降る雨がきりさめ、其のきり雨の空が恰かも芙蓉の爲め

に晴れて打つてかはつた天氣になつた。其の天氣が芙蓉自分が作つた天氣の如くぢやといふので、丁度足利の亂世を豊臣の天下にしたといふと同一の言葉である。成程芙蓉の晴やかな花は、きり雨の空を天氣にしたとふい趣があるやうに思はれる。或は霧雨の場合も芙蓉の周圍丈は一種の晴れやかな天氣を持って居ると云ふ事にも見えるが僕は先づ前解ぢや。

草いろくおの花の手から哉

秋の様々な花を見た趣で、秋草はいろくある、いろくの花が咲く、或は赤、或は黄、或は紫など色と形と様々で、何れを見ても美しく眺められる、其の花ごもが各々手柄をあらはしてゐる事ぢやといふに過ぎぬ。

此寺は庭一ぱいのはせをかな

實見した即景だらう。芭蕉翁が或寺へ行きしに其寺に一本の芭蕉があつて、頗る大きく成長して庭中に廣がつてゐるのを見た、それを庭一ぱいと誇張した所が詩人の興である。寺に芭蕉の如き青々としたものが一面に茂つてゐるのは何となく配合がよい。尤も句の表面にては芭蕉は一本に限らず數本もあると解せられるが、一本若くは二本位の大きな芭蕉とする方が景致が多いやうに思はれる。

秋草庵

道ほそし角力取草の花の露

小徑に秋の小草が茂つてゐるその中に、角力取草が花をつけて、其花に露を置いてゐる、如何にも趣ある小徑ぢやといふたので、此の小徑は庵名に依つて考ふると其の庭の小徑であるらしい。

伊勢の斗從に山家を訪れて

蕎麥はまた花てもてなす山路かな

伊勢の國の人なる斗從といふ男に自分の住める山家を訪問されてといふ前書。或は幻住庵でも訪はれたのであらうか。

客の斗從に對した挨拶で、折から山の庵のあたりに蕎麥畑があつて花がさいてゐたと見える。それを興じて折角のお出に蕎麥切でも差上げたいが、今は未だアノ通りの花の季節なれば、アノ花で御もてなしを致さう、何もないが充分に花を眺めて下さい、此のやうな山中では是だけの饗應で御座るといつたのである。

三日月の地は朧なり蕎麥の花

空には三日月が淡くかゝつてゐる。地には蕎麥の花が白く低く咲いてゐる、空は夕くれで三日月がかゝつてゐるから未だ明かであるが地面の處は流石に闇いのであるのに蕎麥の花の白い爲めに朧々とし

てゐるといふので、蕎麥の花の爲めに地面が臍に眺められるといふたのである。三日月のといふの字は三日月の場合にといふ意味ぢや。

知足の弟金右衛門が新宅を賀す

よき家や雀よろこぶ背戸の粟

知足といふ人の弟に金右衛門といふ男があつて、それが新たに家を建てた其の新築祝ひの句ぢや。

新築した此家は誠によい家ぢや、雀が嬉しさうな聲して鳴き群れつつ背戸の粟をついばんでゐる、と言つたので、家ありて背戸畑には粟を植ゑ、それに雀が群れ遊で居る景を表面に言ひ現はし、裏面には矢張り斯様な新宅へ来て御馳に走なる自分もよろこばしいといふを雀をかり來つてほのめかしたのである。

初秋中の一日此處に遊で青瓢の題を得

夕がほや秋はいろくの瓢かな

初秋は舊の七月、其の七月の中の一だから即ち七月十一日、此處に遊びて俳會したが自分は青瓢といふ題を得たといふ前書。

夕がほやといふは、夕貌の實がふらくと下つてゐるアノ夕貌とさしたので、右を見るにつけ、秋にはさてもいろくの瓢がある事であるわいと興じて言つたのである。いろくの瓢といふのは夕貌の實をふくべと見なして其の夕貌の形ちがいろくであるとも解せらるれど、此處では夕貌の外に瓢箪もある糸瓜もある秋は色々の蔓草にふくべが出来る事ぢやと言ひ、夕貌を言ひて他の青瓢に及びしものと見るが好いであらう。

加賀國を過る

熊阪かゆかりやいつの玉祭り

これは加賀の國を過ぎた時に作つたといふので、加賀は熊阪長範の
出た所、其加賀を過ぎたのが恰も七月の魂祭りの頃であつたから歴
史上盜賊の首領として名の聞えた長範に思ひよせて、此處は彼が出
た所であるが今も尙ほ其の縁者があるだらうか、又た其縁者が今頃
は魂祭をしてゐるだらうか、其の魂祭はいつの玉祭即ち長範死して
より何百年目に當る玉祭りであらうか、是非此あたりでは縁者もあ
つて何百年かに相當する玉祭りをやつてゐる事であらうと言つたの
である。併し其實は現在に熊阪の魂祭は勿論縁類のあらうと思つた
のではなく、唯だ歴史に關する詩的感興を斯様に歌つたに過ぎぬ。

鳥部山

玉祭けふも焼場のけむりかな

鳥部山は京都の郊外にある火葬場で、其處を通つたか又其近處から
其處のけむりを見たかして作つたといふ句。

玉祭は其時の季節で、人家では各々玉祭をしてゐる。又鳥部山では
今日も人を焼く煙が立のぼつてゐる、ア、祭られてゐる者もあるに
又た新たに祭られる可く現在焼かれて居る者もあるわい、と言つた
のである。勿論此句も今日もといふ言葉に深く拘はらず、佛教の無
常迅速を主として説いたとせず、寧ろ單純にアチコチ玉祭してゐる
家があり又た鳥部山の方には煙が立つてゐるといふ客觀の景色の上
へ僅かに前述佛教等の主觀を交へて叙したものとすればよいのであ
る。又た實際芭蕉翁の經過した時に人を焼いてゐたと解せずとも唯
だ何か鳥部山の方に煙が立つてゐたそれを直ちに焼場の人やく煙と
言つたとしてよいのである。蓋し詩人は嘘をつく事は勝手次第で、

上手に嘘をつけば即ち詩となるのである。

尼壽貞かみまかりけると聞きて

數ならぬ身こな思ひそ玉祭り

壽貞といふ昔芭蕉翁の召仕つて居たことのある尼が死んだと聞いて作つたといふ句。

尼の死んだと聞いたのが折ふし盆であつたので、其人を思ひ出て、誠に數にも入らぬ身で人間として價のない自身であるとは思はぬがよいぞや、汝も人間としての思ひ出がないことはないのぢや、吾々は今ま汝の玉祭をして充分汝を慕つてゐるわけぢやからと言つたのである。舊婢女に對する情として自然に哀れがある。言葉つきもそれに相應してゐる。

蓮池やをらて其儘玉祭り

玉祭をしてゐる庭に蓮池があつて、花が咲いてゐる、それを見て打興じたのでもあらう。蓮池の蓮を折つて靈前にさゝげて玉祭をしないでも、折らずと池にある儘で玉祭りの花とする事が出来ると言つたのである。尙ほ言ひ換ゆれば蓮池其儘の景色こそ亡者も一入娛く眺むるであらうといふ位の事ぢや。着想が一寸面白い。

甲戌の秋大津に侍りしをこのかみの許より消息せられければ舊里に歸つて盆會を營むとて

家は皆杖に白髮の墓參り

甲戌の年の秋に大津に居た所が、兄上の許より消息をして來た、そこで舊里即ち伊賀に歸りて兄上諸共に盆の祭を營むとて此句を讀むといふ前書ぢや。實際芭蕉翁が故郷へ歸つて後の作か又は大津に居つたが一應歸つて盆會を營まうと思つて作つたのか何れともわから

ぬ。併し兎に角に句は墓參をする現實の場合として作つてゐるのである。

一家は皆な杖にすがつたり白髮の頭などで墓參をする事である。兄と言ひ自分と言ひ、又た其外の親戚と云ひ何れも皆な年とつて姿形も變はつた、其者共で墓參をする事ぢや、と一種の人生の感慨をうたつたのである。さも老人が大勢ある如くに家は皆なと極言した所が詩人の興である。

骸骨の贊

夕風や盆挑灯も糊はなれ

夕風が吹いて盆提灯をゆらく動かしてゐる、と見れば提灯の或部分に既に糊はなれがして、紙がふわ／＼と風にあほられて居る、といふ即景で盆の夕方の景色をよく現してゐる。此句をよむと骸骨の

軀も満足でなく骨のばら／＼になつた所を連想する。作者にも多少其れをほのめかす心持があつたらうか。

むかし聞け秩父殿さへ相撲取

角力の句で、角力は秋季になつてゐる。

昔は斯様であつた、其昔しの事を聞いて置かれい、彼の秩父殿といふ大名さへも角力取であつたのじやと言つたので、其實は秩父重忠は相撲を業としてゐたのではない、唯だ或る時角力を試みて勇力をためたといふに過ぎぬ。それを直ちに相撲取であつたと言つたのが一の興で、歴史上角力取は中々えらい者ぢやと言つて多少からかつた心持も見える。又た上五文字は聞けむかすとすべきであるが、調子の都合から顛倒してむかし聞けと置いたのである。

許六が壽に

勝負力いつも上手に米の食

許六の畫は角力取でも書いてあつたのか。

今勝つた角力はいつも上手に相撲をとる、此奴は常に米の飯を喰うてゐるわい、と言つたので、上手にの下に相撲をとるといふ言葉が略されてゐるのぢや。即ち常に米の飯を澤山喰うて肥え太り且腹がシツカリしてゐるから。上手に相撲つて勝つてばかり居る、と打興じたのである。裏面には許六の畫に對し、佳い畫ぢや、常によく書くことぢや、畫の素養が腹にシツカリあるわい、とほのめかしたのである。

庵にかけんとて句空が書せける兼好の繪に

秋のいろぬか味噌壺もなかりけり

庵にかけける爲めに句空といふ男がある他の人に書かせた兼好法師の

畫に題したといふ前書。兼好は吉田兼好と言ひ徒然草の作者で、閑居して厭世の人であつた。

すべての周圍が一面秋色で満たされて如何にも淋しく、我住居も此身も悉く秋色の淋し味で満たされてゐる。唯だ住居と此身のみならず、衣食の事も頗る乏しく、糠味噌を貯へた壺だもない有様で、如何にもわびしく秋を送つてゐる事ぢや、と言つたのである。兼好の畫といふより徒然草中の北條氏が味噌の残りで酒をのんだのを思ひ浮べ、其の北條氏の其夜には未だ味噌だけは有つたが、今日の自分は其の味噌すらもない、といふ心持を暗に含ませたのであらう。糠味噌とは我郷里では糠と醬油糟とを搗き混ぜて食用にしたものゝ名ぢやが此句のも蓋しその種類。

しつかさや繪かゝる壁のきり／＼す

如何にも寂然として静かな事ぢや、折ふし繪をかけてある壁にきりぎりすがとまつてゐる、と言つたので如何にも秋の夜の淋し味をよく現してゐる。想ふに是亦た前の題に關係があるので、兼好の畫を壁にかけてゐるが、其の兼好も静寂、自己もきりぎりすの如きさびしき虫に縁のある者ぢや、と言つた心持があるのであらう。又た此處のきりぎりすは鳴いてゐずに止まつてゐるのみとして興があるやうに思はれる、此句の缺點は繪がかかるの言葉が少々苦しんで居る。

益過て霄やみくらし虫の聲

既に七月の益も過ぎて月の出がおそくなつて來た、爲めに霄の程は闇でくらい、そのくらいうちに虫の聲がしてゐる、と言つたのである。若し單に霄やみくらく虫の音がしてゐるのでは左程の興もないが、益過てと上五文字を置いた爲めに多少のあはれを感せしむるやうになり、此句に興味を添へた。

うになり、此句に興味を添へた。

床に來て鼾に入るやきりりくす

人が床に臥して鼾をかいてゐると、きりりくすも床の下へ來て鳴く、其聲が人のいびきと一緒になつてゐると言つたので、詩經七月の詩に蟋蟀床下に入るといふ典故よりして寐床のきりりくすを詠じたので、是は別に珍しくもないが、いびきに入るといふ奇想を着けた爲め一種の佗つき趣があらはれて面白い句となつた。

朝なく手習すくむきりりくす

曉方のきりりくすを詠じたので、毎朝々々人に手習をせよと勸むる如く鳴くアノきりりくすよ、といふので、きりりくすの朝の聲の清しく引立ちて人の惰眠を破る如き趣は何となく人の業務を勵ますかにも思はれるものである。殊に讀書と言はず手習と言つたのは頗る朝

の心持に善くかなつてゐる。

太田の神社にて

むさんやなかふこの下のきりくす

太田は實盛が討死した所で、今も其の靈を祭つた神社があると聞いてゐる。

齊藤實盛は手塚の太郎と引組んで討死をしたゆへに其の歴史を思ひ出でて理想的に此句をなしたので、如何にも無慘でいたましい事ぢや、胃の下にきりくすの鳴いてゐるのはと言つたので、野中に胃が捨てゝあつて其下にきりくすがふせられて聲を放つて鳴いてゐるてふ景色に見たのである。むさんやなどはきりくすに向つて言つた言葉乍ら、裏面には胃を着て討たれた人にも當てゝ感慨をのべたので、此の胃を着て討たれ人も如何にも無慘至極ぢやといふ心持

である。又た此句は最初に謠の實盛の文句を其儘に取つて、あなむざんやなどやつたのを芭蕉俳風の變遷上、個様な長語をやめるやうに成つてあなの二字を削り單にむざんやなどとしたのぢやと聞いてゐる。あなの二字は成語だからあつてもよい、又あな勝ち加へずとも情は充分に現れてゐる。ツマリごちらでも好い。又胃の字を猿蓑の原本以來甲の字に誤り書て居るのは今更ながら俳人の文旨に驚く。

白髪ぬく枕の下やきりくす

老人の境界を詠じたので、寢やうと思つて身を横たへ枕をして頭へ手をあげて白髪をぬく、其の枕の下にきりくすが鳴くといふので、此の枕は家の内であるか但しは草枕といふ心で旅寢の佗とき床であるか判然しないが、兎に角に老衰の身で飄泊しつゝある芭蕉自身の境遇を叙したのであらうと思はれる。併し白髪ぬく枕と綴つたのは

少し巧みに過ぎ且言葉も充分でないと思ふ。

さびしさや釘にかけたるきりくす

さびしい事ぢや、釘にかけてあるきりくすを見るにつけてもといふので、釘にかけたるきりくすとは籠に入れてかけてあるのか、又は小供が蚕を捕らへて糸にでも括つゝかけてあるのか何れともわからぬが、兎角きりくすの捕へられ釘にかけてある様が如何にも物あはれでさびし味を感ずるといふのであらう。

草の戸ほそに住みわひて秋の風の悲しげなる夕ぐれ友
たちの方へつかはしける

蓑虫の音をきくに來よ草の庵

草庵に住み侘びて秋の風が悲しさうな夕方に、友人の處へ消息をやつたといふ前書で、其の書面の末にでも書添へた句であらう。

自分の草庵には蓑虫が鳴いて淋しいから其の鳴音を聞きに來玉へなといふので、蓑虫は侘しくはかなく親戀じとて鳴く虫とせられてうき身を訴ふる時などによく引合に出される虫ぢや、そこで芭蕉が獨り住むてゐる庵の秋にあひて物さびしく感ずるを蓑虫の鳴く音になぞらへた心持も裏面に含まれて居るのぢや。

蜻蛉や取つきかねし草の上

蜻蛉やとうたひ起して、それが取つき兼ねてゐるよアノ草の上に、草は秋の風になよくと動きく、蜻蛉の取つかんとすれど取つき兼ねてゐる、といふ野道などの秋の景色ぢや。

胡蝶にもならで秋ふる菜虫かな

菜に虫のゐたのを見て興じた句で、蠶のやうな種類の虫は皆な羽化して蝶や蛾になる、然るに此の菜虫は別段の思出もなく蝶にもなら

すに秋を経て其儘である、サテも菜虫の果敢ない事よと言つたので
其實は菜虫に左程同情をよせたのではなく、主として我生の何の思
出もないのを彼れに比して叙情した位に過ぎぬ。

老の名のありともしらで四十雀

四十雀は秋季に山林に群れ遊ぶ小鳥で、四十の雀と書かれてゐるよ
り趣向を立て、人生四十を初老となす、既に汝は四十といふから
には老の名がついて最早老人仲間である、然るに左りとも知らず喧
しく鳴く事よ、鳴聲のサテも老人らしくない入釜敷事ぢやと興じた
のである。少しく理窟くさいやうなれど、四十といふ名に因んで、
單だ途轍もなき事を無邪氣に云ひて多少滑稽を弄したに過ぎぬか
ら、一讀興味を感じて厭味は左程に覺ぬぬ。

田中の法藏寺にあそびて

苜跡や早稲かたくの鳴の聲

野のけしきを眺めた客觀的の句で、其のあたりの田は皆な早稲田で
ある、田の片側は既に刈り取つてあつて片側は未だ刈らずに其儘に
なつてゐる。其の刈つた跡には鳴の鳴いてゐる聲がするといふ景色
ぢや。即ち刈跡一方にあり、一方は刈らずある。鳴の聲は刈田の方
にあるといふのを言葉を錯綜させて叙したので、何となく淋しみを
感ずる句ぢや。

田家

かりかけし田面の鶴や里の秋

是亦た前と略ぼ同じ景色で、鳴の所が鶴になつてゐる丈けの相違ぢ
や。即ち刈りかけし田面とあるから既に稲は熟して刈かけてあるが
尙ほ未だ全く刈盡されぬ田で、或處は既に刈跡となり或場所は尙ほ

稻が生ひてゐる、其田に鶴が下りて遊んでゐる、ア、好い景色の里の秋であるわいと叙したのである。

榎の實ちる棕鳥の羽音や朝あらし

棕鳥は多く秋季に棕の木などに群れて其實をくふ小鳥である。そこで上からは榎の實がばらばら散る、其の木の上には棕鳥の羽ばたく音がする、朝嵐が吹いてゐる、といふのでツマリ秋曉の即事ぢや。吾々もよく見る景色で一寸感じのよい句のやうに思ふ。

田莊酒家

桐の木に鶉啼なる塀の内

田莊とは田舎の事、其の田舎の酒屋で作つたといふ前書ぢや。

桐の木があつて、塀の内には鶉の鳴く聲がしてゐるといふ丈けである。桐の木に鶉鳴くと言つても木に止まつて鳴くのではない。桐木

には桐木ありてといふ位の意味ぢや。それから此の鶉の居る所と桐の木のある所と其場所が充分に明かでないが、想ふに桐の木は塀の上へ高く立つて居る、鶉は其姿を見ず、唯鳴く聲がするといふのであらう。

鷹の目も今やくれぬと啼うつら

鷹は夜に入ると目の見えなくなるもの、鶉は重に夕方から鳴くもの、其處で夕方に鶉が鳴いてゐる其の聲が恰も鷹の目は今は早や暗く暮れて小鳥の姿も見えなくなつたからモ一自分は鳴いても大丈夫ぢやと言ふやうに聞えると言ふので、其の今やくれぬを鷹の目のくれるのと日の暮れるのと二つを兼ね現してゐるのぢや。是等が所謂詩的の言葉で、多言を費さずに二つの事柄を現し得るのである。

稻雀茶の木畑や逃ごころ

稻雀は秋の稻が實る頃に遊び、稻をついばむ雀で、雀の特別の種類でなく單に稻に居るから此名を得たのであらう。其の稻雀が今迄稻について居たが、折ふし人の行つた爲めに稻を去つて傍らの茶の木畑へ逃去つた、サテモ此の稻雀奴は善い逃場所を持つてゐると興じたのぢや。一方は稻田、一方は茶畑、それに雀がアチコチするといふやうな趣も現はされ、且つ雀に對してからかつた心持もある。一讀してよい感じのする句ぢや。

青くてもあるへきものを唐辛子

唐辛子其物を咏じた句ぢや、唐辛子は熟するに従つて赤くなるものであるが、赤くなると共にそれを食へば辛味を覺ゆる處より一寸戯れて、唐辛子よ、お前は何時も青くて居ればよいものを、何故に赤くなるのぢや、辛くなるのぢや、と興じたのである。詳しく此心持

を解すると、唐辛子の辛いのは多少怒つてゐるやうな趣がある、左様に怒つたやかましいものとならず、穩かな柔和なもので居たら善いのにと言ふやうな心持もある。

かくさぬそ宿は菜汁に唐辛子

佗人の宿の有様を戯れて咏じたので、決して隠しはせぬ有の儘に言ふぞよ、此宿は菜汁と唐辛子があるだけで其外には何も設けがないと言つたので、人でも尋ねて來た時に挨拶旁言つたものであらう。

大風のあしたも赤し唐辛子

秋の嵐の吹く時は多くの木草は葉ちり枝亂れて淋しくあはれに成るのが常である、それに唐辛子だけは、大風の吹いた翌朝も赤々として依然たる姿である、何處を風が吹いたかど色も變へずに濟まし切つてゐる、と戯れ興じたので、何の事もない平凡のやうな處に却つ

て多少の詩的趣味を存してゐる。

木曾塚の舊草に在て敲戸の人々に對す

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし

木曾塚は義仲の塚で江州粟津の邊りの義仲寺に在る塚で、芭蕉翁嘗て此の寺内に庵を結んだ事があるが木曾塚の舊草とは其處の事であらう。古人の塚故舊草といつて草廬に聞かした心であらうが、チト六づかしい熟字ぢや。

兎角其處に居た時に戸をたゞいて尋ねて來た人々に對して作つたといふ前書。

我が草庵の佗しさを知つてくれ、穂蓼と唐がらしが生ひ茂つてゐるばかりぢや、と言ふので、三徑荒に就くといふやうな心持を折節の景物の穂蓼と唐童子とを藉り來て現はしたのである。

柳陰軒にて

散柳あるしも我も鐘をきく

柳も秋が來て葉の散る柳となつた。軒の主人も我も共に鐘の音を聞きつゝあるといふので、如何にも淋しい景情が現はされ、其時も夕ぐれであるやうな處が言外に現はれてゐる。何となく餘韻があつてよい感じのある句ぢや。

全昌寺にて

庭掃いて出はや精舎に散柳

精舎へ來たが是から此寺を出て歸らうよ、歸るに就ては折ふし庭一面に柳の葉が散つてゐるからこれでも掃除して出かけませうと言つたので、想ふに全昌寺へ一宿して翌朝暇乞ひして歸る時の句でもあらう。

畫贊

鷄頭や雁の來る時なほ赤し

此の鷄頭といふは葉鷄頭の事であらう。それを鷄頭やとうたひ起し、それが雁の來る時になると愈々益々赤くなると言つたに過ぎぬ。元來葉鷄頭は支那人も雁來紅と名づけて雁の來る頃には最も赤くなるものである。併し既に雁來紅の名ある以上は此句は頗る陳腐にして平凡と言はねばならぬ、尤も其頃の俳人連は漢詩に疎いから矢張珍らしく思つて傳唱したのかも知れぬ。

堅田にて二句

病雁の夜寒に落ちて旅寢かな

病氣をした雁が夜寒の時分に空より鳴き乍ら落ちて來た、其聲を聞き乍ら自分は佗しき旅寢をしてゐると言つたので、折から堅田の地

であつた所より堅田落雁といふ名所の景物に思ひよせ、自己の佗しき旅寢の情懷を現はしたのである。併し病雁の落ちるといふも餘りに突飛なれば、其時に芭蕉自身が病んでゐたかして、我病の佗しさを雁にかけて病雁と詠じたのであらうか。

海士の家は小海老にましろいごと哉

いとろは竈馬と書いて、背は海老の如き文あり足長く馬の形ちにも似て秋寒に人家に入り竈などによく居る一寸餘の昆虫である。其の虫が海士の家に於ては海士の漁し來つた小海老に交つて居ると言つたので、堅田は湖邊で小海老の取れる所、其の小海老を取つて籠に入れてゐるのに、實際其中に竈馬も這入つてゐたこのことであらう。よく漁家の佗しさを現はしてゐる句ぢや。殊に似寄つた物を配合したのぢや。

目にかゝる雲やしはしの渡り鳥

空にはアチコチに雲が出てゐる。秋の事なれば極く薄い雲かなんかで、餘り目に立つて見える程の雲でもない、然るに其の薄雲のあたりを渡り鳥が飛び渡つた、其れを詠める暫時の間は雲のあるのに氣が付き即ち目にもかゝると言つたので、秋天高くあるか無きかの雲邊に渡鳥が小さく見ゆる景色は一寸よい感じがするが、叙寫法は充分とも思へぬ。

奈良にて

ひいご啼尻聲かなしよるの鹿

鹿の聲は聞いた事がないから果してヒーと鳴くか否かは知らぬが、兎角芭蕉の聞いた時はヒーと鳴いたと見える。其のヒーと跡を引いて鳴く其の尻聲が如何にも悲しく感ぜらるゝ、夜の鹿の聲は、と言

つた丈の事。

いたゞいて落穂拾はむ關の前

或る關所の前に落穂が散らばつてゐる、其の落穂を有難くいたゞいて拾ひ取らうよ、と言つたのに過ぎぬ。蓋し此の言外には政府が關所を設けて取締りをしてゐる爲めに天下が太平であつて、吾々も其餘澤を受け安全に旅行が出来る、誠に有難いわけぢや、故に此の落穂を麓末にせず、有難く拾はうといふ心持、即ち公儀を尊敬する精神を關所の前で起したのである。

俱利伽羅や三度起きても落し水

加賀と越中の境なる俱利伽羅峠に宿つた時の句と見ゆる。自分は此處に宿つて早や夜中に三度も目がさめて起きたが、三度共に落し水の音がしてゐた、わびしい旅寐である、と言つたのぢや。俱利伽羅は

平家の軍が義仲の軍と戦ひ、敗北して谷底へ追ひ落されたといふ事より折ふし秋の田の水を落す時であつたから落し水と言つて、實際の情境をあらはすと共に多少歴史の感懐をもほのめかしたのであらう。

杉の竹葉軒といふ庵を尋ねて

粟稗に貧しくもあらず草の庵

竹葉軒を尋ねると、其のあたりは粟や稗が澤山に生ひ茂つて貧しい所は少しも見受けられぬ、此の草の庵の有様はと言つたので、粟や稗は必ずしも此主人の所有の田地でもあるまいが、唯だ打見た其處の景色を斯様に打ち興じたのであらう。貧しくもあらずとは俗情で不自由のない事を褒めたのではなく、秋景を管領して餘裕綽々たる菴主の心を稱したのぢや。

故人に逢て

冬瓜や互ひにかはる顔の形

久しぶりで逢つて見ると、昔しの顔の形も變つて互ひに老ひさらはひ、昔しの俤はあり乍ら見違へるやうに成つたといふのを、季節の冬瓜を藉り來つて咏じたので、冬瓜の様々な形をしてそれト異なつてゐるやうに自分等お互の顔形も變つたと言ふのである。尤も表面は唯だ冬瓜の顔が様々であるといつたのみであるが、裏面には右いふ如く人事に通はしてゐるので、即詩經の比の體といふ所である。

西行谷

芋洗ふ女西行ならは歌よまむ

西行谷は西行に關した故事でもある谷であらう。其谷に折ふし芋を洗つてゐる女が居つたと見える。芋洗ふ女と呼出したのは必ずしも

此女に向て云ふのでなく芋洗ふ女があると打見た所を歌つたので、此處に芋を洗ふ女が居る、若し西行が此女を見たら歌をよむ事であらう、芋洗ふ女は西行の歌の材料となつたであらうと地名から即事を興じたに過ぎぬ。

山中十景題高瀬漁火

かとり火に秋魚や波の下むせひ

山中に十景といふのがあつた、其中の一なる高瀬の漁火といふに題したといふ前書。

かとり火が燃えてゐる、その爲め煙が立つてゐる。火が燃え煙が立つ爲めに鰍は波の下に煙にむせび苦んでゐると一種理想的に言つたので、事實波の下へ煙のゆくわけもないから魚はむせぶわけはない、それを個様に虚構して却つて漁火其物の状況をよく叙したので、鰍

といふ秋の節物によりそれを捕る漁業の事に及び、且つ何となくあはれを含ませて一寸面白い句となつたのである。

嵐雪か四國に渡る時

旅鳥二百十日も船支度

旅鳥とは一所不住に飛んでゐる鳥の事であるが、此處では旅をする人に比喻したのである。旅人といふよりは旅鳥といふ方が自然趣のあるからぢや。二百十日は風の荒るゝ目で海は危険至極な時候である、それにも拘らず舟支度をして急いでゐる事よ、今少し荒れを見合せ平穩を待てばよいのにそれも待ずに早や行く事か急がしい事ぢやと言つて、惜別の情を暗かに現はしてゐる。漢詩の「如此風波不可行」といふのも多少此句の粉本となつてゐるかと思ふ。

猪も共にふかると野分かな

秋の野分が野一面を吹き荒す時は、あらゆる草木も爲めに靡き動かされて居る、其中へ來ると猪の如き猛獸も共に吹かれ靡かされてゐると言つたので、野分の荒れる様を猪をかりて現したので、猛きものも秋の野の趣に免れる事出來ず、猪といへど等しく秋景の寂味に入つてゐるといふ心持であらう。

吹飛す石は淺間のあらし哉

そこから邊りへ吹飛されて來る石がある、空のあなたを見ると淺間山の暴風であつたといふので、頗る壯烈な景色を叙した。文章の上よりいふと淺間の嵐の爲めに石が飛ばされてゐるいふ可きを言葉を反對に置いて吹飛す石、其石は淺間の嵐の爲めぢやとしたのである。又若し語格に拘泥せば、吹飛さるゝ石はとせざる可からざるわけなれど、斯くすると調子がたるみて斯かる豪壯なる事柄を言ひ表はす

に適せぬから、其邊は語格に拘泥せず吹飛す石として石自身が自分を吹飛すかのやうに叙したのである。蓋しこれは芭蕉翁以來句作上一の變通法となつてゐるのである。

三日月や早や手にさはる草の露

日は暮れんとして空には三日月が細くかゝつてゐる、道傍の草には露を持つてゐる、それが自分の手に觸つたといふので、露は元來夜に於て置き朝に消ゆるものであるに、日の暮れるか暮れぬに早やくも草の上に置いてゐる、折ふし三日月も出てゐたといふ景ぢや。想ふに草鞋のひもでも結んだか但しは路傍の石に腰でもかけた場合の即興であらう。

小夜の中山にて

馬に寝て殘夢月遠し茶の煙

小夜の中山を越ゆる時の情況で、折ふし足の疲れた爲め荷馬でも借りて鞍上にうとくと寝たと見ゆる。さうして目がさめたが未だ夢が幾らか残つて半分は現、半分は夢心地、折ふし行く手を見ると月が遠くに落ちんとして未だ落ちず残つてゐる、其の月のかたには何處の村か朝の茶沸かす煙か立つてゐると言ふ意味で、其時の情懷と景色とを合せ叙したのである。

残夢月遠しの一語は夢からさめた如くさめざる如き心持と月を遠方に眺める心持とが互ひに似通つてゐる所より錯綜して歌つたので、何となくボツとして氣の遠い所があらはされて言ふ可からざる情味がある。又茶の煙といふも如何にも清い淋しい景色で、曉發の旅情がよく現はされてゐる。全體に於て餘韻餘情の多い句であるが、併し俳調に至つては甚だ借厩にして虚栗集時代の調子を用ひて居る、

次の句も亦然り。

神路山にて

三十日月なし千ごせの杉を抱嵐

伊勢の神路山で作つたといふ前書、折ふし三十日の日でも夜に入つた場合に大杉の梢に嵐が吹いてゐるのを見て作つた句と見える。其處で三十日の事なれば月がない、神路山はくらやみである、其のくらき中に千年も経たと思はるゝ杉が立つてゐて、其杉を抱いたやうに嵐が吹いてゐる、と其の實景を叙したのである。抱嵐とは如何にも奇態な言葉であるが、或いは其時に作者自身が如何にも大きな杉である何抱えあらうかと自ら抱えて見た處より、思ひついて言つたものか。兎角斯く言つた爲めに嵐の強く吹いてゐるのも現はされ、且つ杉の大なる事も一層思ひやられると、又た一方からは嵐の大

杉に吹く所は何となく大杉を包圍してゐるやうな感じもするので、頗る奇抜な着想となるのぢや。是等も句作上初心者の心得置く可き手段である。

見る影や未だ片形も宵月夜

見る影とは即ち人の眼に入る月其のものゝ影をいふ。片形とは完全なる形状といふ位の事でもあらうか。そこで見る影やと歌ひ出して、其の眼に入る月影が今宵は片形で居る、それも其の筈ぢや、宵月夜の頃である、といふので、宵月夜の月は其の形状の缺けて居て圓満ならぬ處から、それに照らさるゝ山川草木或いは建物又人物の類に至るまで總てが物凄まじく眺められ、随つて此光景に對する人自身も何となく心細く便りないやうな感じが起るものぢや。そこを叙寫したのであらう。併し十分には分からぬ。

雲折く人をやすむる月見かな

月見の事であるから頻りに月を眺めてゐる、すると折々雲が出て其月を一寸蔽ふことがある、其爲め暫らくは目を休めて休息する事が出来ると言つたので、或は月を見るのが甚だ苦勞である如きも其の反面には美しき月に見とれてゐる心が強くあらはされてゐる。休みたい、休み得て結構ぢやといふのは實は休まず淨かれ楽しんで居た心持が現はされるのである。併し全體が餘りに巧みに失してゐる爲め多少の厭味を免れぬ。

いさゝかなる所に旅立て舟の中に一夜をあかして曉の
空蓬よりかしらをさし出して

明ゆくや二十七夜も三日の月

いさゝかなる所とは一寸とした近い所といふ意、其の近い旅をして

舟の中で一夜をあかして、翌曉に舟の蓬から頭を出して咏むたといふ前書で、或いは伏見から夜舟に乗つて大阪へでも下つた場合でもあらうか。

夜あけに舟の蓬から頭を差出した時に、折ふし二十七夜の曉であつた所から、二十七夜の弦月が今ま西へ入らうとこしてゐる、それが恰も三日月のやうに思はれたと言ふのぢや。即ち二十七夜の残る月を三日月様ぢやと興じた丈の事。

川舟やよい茶よい酒能月夜

川舟の中で口に出まかせに咏じたので、川舟に乗つて遊ぶ、其時に恰もよい茶を飲み、よい酒を飲み、加之空には美しい月が出てゐる、心持のよい事ぢや、うれしい事ぢや、今晚は何も彼もよい盡しぢや、と興じたので、芭蕉翁其時の御機嫌が目に見る如くである。好き月

夜を能き月夜と書いてあるに見ても俳人の文字に暗かつた事いつもながら驚く。

座頭かこ人に見られて月見哉

芭蕉翁は俳諧法師の事なればいつも頭を剃りて頭巾など被り身にも被布やうのものを着てゐたのであらう。其姿で何處かへ月見に行つて頻りと月を眺めてゐると、其處へ他の者がやつて来て、オヤ彼處に座頭が月見をしてゐる、目盲の癖に月見とは妙だなどと窃に嘲りでもしたのを其儘に興じたのであらう。一寸滑稽ぢや。

古將監か古實を語りて

月やその鉢の木の日の下おもて

古將監とは能師であるさうな。其人が能に就いての古實を語つたのを聞いて作るといふ前書。末五の下おもてといふのはシテの面着ぬ

場合の事ぢや。そこで月が今ま照らしてゐる、能師が勤むる其鉢の木のシテの下おもての顔をといのふので、暗に能方が善く古實を心得てゐて如何にも面目を起してゐる事を月が其顔を照らしたと言つて現はしたのであらう。其時丁度鉢の木の能の古實を語つたから鉢木の下面とやつたのかも知れぬ。鉢の木の源左衛門は即ち下おもてで出るのぢや。

鹿島根本寺にて二句

月はやし梢は雨を持ちながら

これは夕ぐれの景色か或は夜に入つての景色か充分わからぬが、兎角雨が降つてゐたのが晴れるや否や月が出たといふ景色で、今迄雨が降つたので梢には未だ雨を持つてゐながら月が出た早い事ぢやと詠じたのである。

寺に寝てまこと顔なる月見かな

お寺に寝たので、眞面目くさつた光もらしい顔をして月見をしたといふだけで、即ち他の場所なれば月見するに一番ざれて見る可きを寺の事であるから嚴格に月見をしましたといつて、其の實は却つて大いにざれてゐる。又た寺に寝てとは寺に宿りてといふ程の意味ぢや。

田家にて二句

賤の子や稻すりかけて月を見る

下賤な者の子が稻をすりかけて月を見るよ、今迄餘念なく稻をすつてゐたが、月が出たので思はずそれに見とれ居るよといふのぢや。田家の景色が善く現され書にもしたいやうである。賤の子やは賤の子がといふと同じ意味であることを調子を調へる爲めにやと置いたに

過ぎぬ。

此句の如きも若しこれを悪く解すると、賤の子でさへも月に對しては見とれる、月は美しいものぢや、賤の子にも風雅心は存する、など言ふ事も出来るが、此句は左様な理窟でなく、單に瞬間の賤の子の有様を叙したのみで、純客觀の句である。斯くてこそ詩味が多くなるのである。

いもの葉や月まつ里の焼畑

これも夕ぐれの景色らしく見ゆる。芋の葉が一面にあつて、月が早く出よかごと待つてゐるやうな趣がある、そこは村里の日に焼けた畑であるといつたので、久しく雨を得ず早魃の爲めに水氣のない田畑となつて一雨欲しげなるさまを叙したのぢや。雨欲しげなるを婉曲に月まつとうたひ、月が出れば露置きて多少は霑つた景色になる

所よりして、人のそれをまつのを芋の葉がまつとして、景色情致兼ね現はしたのである。これ亦た詩人の一手段ぢや。

大曾根成就院より歸る時

何事の見立にも似ず三日の月

何事を以つて見立てゝ見やうと思つても比べ物がない、三日の月は誠に可愛い美しいものぢやと言つたに過ぎぬ。見立てにも似ずなどとは頗る厭味の多い言葉で、着想も平凡ぢや。

あの中に蒔繪かきたし宿の月

家に居て月を見て、如何にも丸く美しくさやかである所から、アノ中へ蒔繪でも書いたら善からう、此の宿にさし込む月面に、と興じたのぢや。餘りに佳句でもないが、無造作にして無邪氣な所に多少の價を持つてゐる。

姨捨山にて

倂や姨ひごりなく月の友

姨捨山は信州の月の名所。

天には月が照してゐる、地には山が聳えてゐる、其山は自から月の友となつてゐる。月の友なる山は姨捨山ぢや、其趣恰かも姨が一人で泣いてゐる倂ぢやと歌つたのである。言ひ替へると、姨捨の山が月の友となつてゐるが、其の子然として淋しい景が姨一人で泣いてゐるやうな倂をしてゐる、といふのぢや。それを言葉を顛倒して倂やと先きに歌ふのは調を高める爲めであらう。餘り工夫が過ぎて却て感じを支へるやうな句ぢや。又た姨捨の故事は贅するにも及ぶまい。

いさよひもまた更科の郡かな

木曾旅中の作と思はれる、いさよひは八月十六夜の事、其の十六日の晩も矢張り更科の郡に止つていさよひの月を見る事ぢや、と言つたので、更科は月の名所である所より、何となく心うれしく思つたのである。且十六夜にも未だ居たといふからには其十五夜名月の夜も無論更科に月見をしたといふ事がわかる。既に名月も月の名所なる更科に於て賞したのに、其翌晩の十六夜の月もまだ同じ郡内に居て見ることが出来た、といふので、旅路の宿泊が日々に替はつて行く興も見える。

善光寺にて

月かけや四門四宗も唯一ツ

善光寺は信濃の善光寺。

四門は天台宗で有門、空門、亦有亦空門、非有非空門の四ツである

としてある。兎角月かけは平等に照して何の差別宗派もない事で、善光寺一面は月を以つて満ちてゐるといふ景色を寺の事であるから佛教の言葉を藉り來つて現したに過ぎぬ。若し之れをあらゆる教も一の眞如の月から出るのぢやと佛説を主とし見れば全く詩味が無くなる、唯だ言葉を佛教に藉りて景色を現したとせねば此句の價値は零となるのである。俳句に於ては「腹はかり物」の諺の如く言葉は元々かり物であるから何處から藉りて來やうとも詩味さへ現はし得ば其れでよいのであるが、此句の下五文字は到底理窟臭い。

仲秋の月は更科の里姨捨山に慰めかねて猶あはれさの目にもはなれずながら長月十三夜になりぬ

木曾の疲も未だなほらぬに後の月

仲秋は八月全部ぢやが、中秋の誤りであらう。中秋即ち八月十五夜

の月は木曾の更科の里姨捨山に眺めて哀れに思ひ心を慰め兼ねて其の時の景が未だ目に在りて離れないのに長月即ち九月の十三夜になつたといふ前書で、十三夜は何處で見たかわらぬが兎角木曾旅行後と見ゆる。

木曾路を旅行したので身體が疲せほそつた、其の疲せの未だに癒らぬ中に早や九月の後の月を見る事である、ア、佗しい生涯でもあるといふに過ぎぬ。尤も裏面は風流者の大得意。

淺水の橋をわたる、俗にあさうつと云、清少納言の橋はとある一條あさむつのと書ける處とそ

あさむつや月見の旅のあけはなれ

淺水の橋といふのを渡つた、そこは俗にはあさうづと言つてゐる。清少納言の枕草紙に橋は云々とある一くだりにあさむつのと書いて

ゐるのは此處の事ぢやさうなといふ前書。

月見をした旅の夜の明はなれ頃に此の地即ち淺水を通つたといふので、あさむつといふ名が朝の六ツ時といふ事に通つてゐる所から斯様に打興じたに過ぎぬ。一寸餘興として言つて置くが、或説には此川は夜中といへども朝の六ツ時頃の明るさがあるより此名を得たといふ事で、余が知る所の好奇者某は此説により此川底には金剛石が多いのであらうと言つて、検査に行きアハ好くば一攫千萬金を企てた事があつたのを聞いてゐる。

月見せよ玉江の蘆をからぬ先

玉江は地名で江のある所と見ゆる。其の玉江で月見をするがよい、其處の蘆を刈り取らぬ先きに見て置くことぢや、若し刈り取つて後ちには景色が損せらるゝからと言ふのぢや。

湯の尾塔下

月に名をつとみかねてやいもの神

湯の尾塔下とは湯の尾峠の事である。峠を塔下とは随分凝つた當て字ぢや。湯の尾峠には天然痘の守札を出す神社があるといふ事で、其處から此句の趣向が出た。即ち月が照らしては明かである爲めに包み了せ得ずいもの神即ち疱瘡神の名が現れるやうになつた、月が此神を照し出してしまつた、といふ意で、元來疱瘡神はミツチャで醜い顔なれば其顔は現したくないのであらうが月に照されて折角隠して居た顔も晒されてしまつたと興じたのである。尤も顔を出すと言つては面白くないが名を包みかねたと言つたので一層興を添へる事に成つた。上卷春の部に「なほ見たし花にあけゆく神の顔」といふ葛城の神の句があつたが、彼れと是れと殆んど同様な趣向である。

燧山

義仲の寢覺の山か月悲し

燧山は源義仲の生長した地方であらう。其處で義仲といふ豪傑が寢覺めに眺めてゐた山だらうか、如何にも月のけしきが悲しく眺められる事よ、と言つたので、義仲は一時勢強く朝日將軍とまで名を輝かしたげれど遂に粟津の深田で最期を遂げた人である、其の一代の事蹟を思ひ浮べ其昔に生長した時の事を此の山月に對して想像すれば、此山此月にも亦た何となく物悲しく眺められるといふ所謂懷古の情を叙したのである。寢ざめの山といふのを寢ざめの時に見た山だとは一寸無理な解であるが、さりとして他に意味の取方もないからしばらく右の如くに解して置く。尤も燧山は彼の蕎麥の名所の寢覺の里の近邊でもあるのか、左すれば言葉に縁は出来る。

氣比の明神

月清し遊行のもてる砂の上

氣比の明神は越前敦賀にある神社で遊行上人の持運んだ砂があるといふ所ぢや。

月が出て其光りが遊行上人の持つたといふ砂の上にさしてゐる、誠に清らかな事である、と言つて、上人の徳を思ひやり月の清い所に配合して此の趣向を立てたのぢや。勿論月色に對する客觀を主として咏じたのである。唯だこゝに注意す可きは、前の燧山の句は月に

對して義仲其人を主人公にしてゐる、即ち義仲を主として懷古の情を叙したのであるが、月清しの句に至つては遊行上人を主として其徳をたゞへたとしては面白くない。どこまでも月を主人公にせねばならぬ。斯く言はゞ必ず疑問を起す人があるであらう、即ち一は歴史の人を主とし一は同じく歴史の人を主とせず、何故にしかく時と處によりて相違を來すかと。是れ大に緊要なる問題で、前句の義仲に於けるは其の人の榮枯盛衰を見て單に世情的に弔つたのであるから、たとひ歴史の人を主人公にするも詩趣に於て少しも碍ぐる所がない、即ち義仲の性質行爲の如何を道義上より論じたのでなく、即ち全く理非曲直を忘れて單に感情的に義仲に就て同情を寄せたのであるから詩として些少の碍もないのである。之に反して若し此句の場合に於て主として遊行上人の徳を稱へたとすれば、ソハ既に佛教

の部類に入り、是非善惡の分別より其人を崇拜する事になるのであるから、最早詩としては何の價值もない事に成るのである。斯様な區別は實に間一髪即ち毫釐千里差のを生ずるのであるから作句者も觀句者も宜しく注意す可き點である。

敦賀夜泊

名月や北國日和定めなき

夜泊とは舟に寝る事であるあるが、これ亦た芭蕉翁のあて字でツマリ宿に寝たのであらう、或いは其地の港なる爲めワザと個様に洒落たのかも知れぬ。

句意は名月の頃であるが北國地方の日和の事ぢやから、折角の夜も晴れるか陰るか定められぬ、誠に覺束ない事ぢやと、名月の前の日か又は其朝でも言つたやうぢやが、芭蕉翁が紀行を見ると、敦賀に

宿つて折ふし八月十四日の夜にて月頗る明かなりしかば明晩の明月も亦た斯くあるべしと主人に語りしに宿の主人答へて曰く、北國の日和は定めなし、アスの空は測り難し、今宵こそ酒をきこしめせとて酒をすゝめられ、月に乗じて氣比明神に詣づ、翌日主人の言にたがはず雨ふる、即ち此句を成す、としてある。左すれば此句は全く十五夜の句で、北國日和の定めなくてトウ／＼雨になつたわい實に意外である残念であると言つたのである。餘り感心せぬ句ぢや。

濱

月のみか雨に相撲もなかりけり

濱とは地名であらう。此日に濱の若者どもの相撲がある筈なのに、月のない許りか、雨が降つた爲め折角の相撲も見合せになつてしまつた、誠に興のさめた事ぢやわいと云つたので、のみかなどいふ

所理窟つぼく、面白からぬ句ぢや。

仲秋の夜敦賀に泊しぬ、主人の物がたりに此海に鐘の

沈みて侍るを國の守のあまを入れて尋ねさせ玉へど龍

頭下むきに落ちて引あぐべきたよりもなすと聞きて

月いづこ鐘は沈める海の底

仲秋八月十五夜に敦賀に宿つた、宿の主人の物語りに、此海に鐘が沈んでゐるのを國守が海士を海へ這入らせて尋ねられたけれど、鐘の龍頭が下むきに落ちてゐる、其爲に手がとりが出来ず、引上げる便もないといふのを聞いて詠ずといふ前書。

中秋が雨で何事もたよりないといふ景情を詠むたので、月はいづこにあるのか雨の爲に在處がわからぬ、此の海の底には鐘が沈んで居て引上る由もないと言つたので、月いづこといふ餘情には鐘の在處

も覺束なく思ふ事をも持つて居る。是亦た前の角力の句と同じく萬事便なく興さめた事ぢやといふ心持を叙してゐるが、前句のやうにのみかなどいふ厭味な言葉がないだけ取柄がある。

木因亭にて

隠れ家や月と菊ごに田三反

木因といふ人の亭で詠むだといふ前書。

木因亭の有様は全く隠家である。菊を植ゑて月が照らしてゐる田が三反ばかりある。月と菊とを見る可き爲めの三反の田ぢやといつたので、其實は菊以外のものも植ゑたらうが、それを専ら風流の爲めの田ぢやといふ所が一種の興である。勿論菊もあつたに相違はない。

斜嶺亭

戸を開けば西に山あり伊吹と云ふ、花にもよらず雪に

もよらず只是孤山の徳あり

其まゝに月もたのまじ伊吹山

斜嶺亭といふ所の戸をあけると西の方には山があつて伊吹といふぢや、此山は花の名所でもなくば又た雪の名所でもなく、花雪何れにもよらぬ只だ孤り立ちの山で君子の徳があるといふ前書である。山の其儘を自然に放任して月などは頼りとせぬ、此の伊吹山であるはい、即ち月によつて景色を添へやうともせぬぢやと言つたので、裏面には世をさけて自ら高しとしてゐる斜嶺亭主人に比した心持もある。又月とのみ云つたが前書の花と雪とに對して三ツ共いづれをも頼りとせぬとの意ぢや。

伊勢の國又玄が宅に止められ侍るころ其妻の男の心に等しく物毎まめやかに見えければ旅の心を安くし侍り

ぬかの日向守の妻髪を切つて席をまうけられし心はせ
今更申出て

月さひよ明智が妻の嘶せむ

伊勢の國の又玄といふ人の宅に止められて宿つてゐる時に、又玄の妻が其男即良人たる又玄の心と同様に物毎まめやかに待遇してくれただからお蔭で旅中ぢやとの心も忘れ安樂に休む事が出来てうれしかつた。其處で彼の日向守明智光秀の妻が良人の客を請する時に其資乏しくて自分の髪をきつて賣り、其金で宴會の席を設けられた心ばへを今更らのやうに語り出てといふ前書である。

句意は空の月もさびて淋しく照らせかし、これより明智の妻の賢かつた物語をしやうからと言つたので、即ち貧苦の節を守るといふ所より月にもさびよと注文をしたのである。

ここに一言す可きは、句中には明智と云ひ、前書には日向守と書いた事で、すべて前書と句とは重複せぬやう様成丈言葉を換ふべきである。初心者の注意すべき一條ぢや。

悼遠流天容法印

其靈を羽黒にかへせ法の月

遠流されてゐた天容といふ法印が遠流の地で亡くなつたのを悼むといふ前書で、句を見ると此法印は羽黒山に居た僧と見える。

其人の靈魂を羽黒山へかへして下され、佛法のお月さまよ、ごうか願ひますといふので、月は法の光りとたゞへてある所から斯く言つたのである。此句は専ら人事を悼みなげきて月の客觀的景色よりも寧主觀的の人事になつてゐるが、而かも願つた所で其甲斐のない無情な天象の月に對して唯だ譯もなく願ふのが詩的たる所以で、若し

専ら佛を尊びあがめて願ふといふ事になると、理窟に落ちて詩とはならぬのである。

名月はふたつありても瀬多の月

江州瀬多の唐橋は二ツある、即ち中島があつて二つに分かれてかゝつてゐる。されば名月も二つありてもよろしいのぢや、瀬多に於ける月はと戯れたので、其戯方の馬鹿らしく無邪氣な所が取柄である。

兼題

夏かけて明月あつき涼みかな

兼題は宿題といふ如しで、兼ねて題を課して作るといふ意味ぢや。今年夏から暑さの酷しい年であつたが、其夏からかけて今日の八月の明月にも尙ほ残暑が強くて涼みをする事であると、或日の即興を叙したのである。併し事實斯様な涼みをしたかせぬかは兼題とい

ふのぢやから分からぬが、兎に角斬新な趣向を構へたものぢや。尤も其年残暑が強かつたのではあらう。

打出の濱にて

いさよひや海老煮るほどの宵の闇

打出の濱は琵琶湖の邊で大津の前の濱の名である。

いさよひは十六夜で、宵のほど少し間がありて月が出る即ち明月よりは少しばかり宵の闇がある、其の短かい宵の程を海老を煮るほどの間ぢやと言つたので、海老は湖邊の事なれば小さい淡水産の海老で、その小さなものを煮るといふ心持が暫らくの間の宵やみとよく配合されて居る。感じのよい句である。

既望賦二句

鎖あけて月さし入れよ浮御堂

既望とは中秋十六夜の事、即ち十五日に日と月とが東西相望み、十六日は既に望みし跡ゆへ既望といふ。其の時に月を見て作つたから既望の賦といつたので、ツマリ彼の東坡が赤壁賦などを思ひよせてコナ堅い言葉を用ひたであらう。

浮御堂はの近江の琵琶湖の邊にある堂で、水中に堂が立つてゐる所より浮御堂といふ。其の堂の鎖をあけて月をさし入れよと歌つたのぢや。湖上の堂の戸があいて月が差込むのは其の景色も心持もさぞすがくしからうと思遣つて斯く言つたのである。月さし入れよとは鎖あける人に命ずる文法で、兼て又月にもさし入ることを望んで居る心持がある。

安々こ出てくいさよふ月の雲

是亦た十六夜の晩に月を見た場合で、折ふし東天低く雲棚引き、そ

こより月の出た場合と見ゆる。其の雲間から月が出たが如何にも安々と事もなげに上り行くといふ心持を顯はし、さうしていさよふてゐる月の其下には尙ほ雲があるといふ景色をも叙したのである。更に文章の上から解すると安々と事もなく出て、さうして未だ其のあたりをいさよふてゐる月がある、又月の關係の雲もあると云ふ事である。彼の雲はよく月を隠して、月は出でんとすれど出て能はぬといふ景色がよくあるが、此句の場合は右に反して容易に月が雲を出た處を歌つて居る。ダガ餘り感じのよい句とは思はれぬ。

正秀亭初會

月代や膝に手を置く宵のやこ

前書は説明する迄もない。初會は初めて發句の會をしたといふ事。月代とは月の將に上らんとする時に四邊何となく白く明るくなるの

をいふので、今ま其の月代がさした、月は間もなく出るだらう、其月を膝に手を置いてチャンとして待つて居る此宵のほどの宿でと言つたので、月代に對して今ま月を見る準備をしてゐるといふ景情がよくあらはれてゐる。

古寺翫月

月見する座に美しき顔もなし

古寺で月を見たといふ事で、それを玩ぶと洒落た前書。

今此古寺に月見をしてゐる一座の中には美しい顔もなく何れを見ても山家そだち、否むつかしげな顔の親仁ばかりぢやと興じたので、佗び人連の座であり殊に古寺であるから、華やかな艶な處は少しもなく枯れ切つて居る様を斯様に滑稽的に叙したのぢや。

月見の賦

米くると友を今宵の月の客

前書説明不要。

佗人の月見の趣で、月の夜に知人が尋ねて來たので打興じたのであらう。即ち平常自分に米をみついでくれる其の友を今宵唯一の月見のお客様としたと言つたのぢや。事實其儘を言つて月見の興を叙し、共に見てゐる客との交情もよく現はれて一寸面白い着想である。

義仲寺にて

三井寺の門たとかはやけふの月

義仲寺三井寺は誰れも知る如く皆江州で近所ぢや。そこで義仲寺に居て月夜に會ひ興を發して、是れより三井寺へ行き其の門を敲き僧でも訪うて見やうか今日の此の月の好いことよと言つたので、是亦た苦もなく叙して餘情あり、且つ芭蕉翁の氣軽い生涯もよく現はれ

てゐる。僧は敲く月下の門の反對にやつてゐる。今日の月とは八月十五夜をいふ例ぢや。

名月や湖水にうかふ七小町

名月の夜湖水に七小町が浮んでゐるといふ理想の句で、湖水なるが爲め自然うかぶといふ感じがあるので、實際浮ぶ譯ではない。こゝが月明かなる湖上に對する詩的理想ぢや。七小町といふは古來草紙洗小町、通小町、鸚鵡小町、卒都婆小町、關寺小町、清水小町、山本小町と云つて其一生の事蹟が七つある。而して湖水に此の七小町を配合したのは、蘇東坡の欲把西湖比西子、淡粧濃沫兩相宜、といふ詩句のあるよりそれに倣つたものぢや、と子規子の俳句問答に解されて居るが、大方ソナナ關係から來たのであらう。

名月や兒達ならふ堂の椽

名月が照らしてゐる。寺の兒が幾人も堂の椽に並んで其の月を見てゐる、といふ景色で、兒といつたのみぢやが堂といふより寺の兒と想定される。薄化粧して振袖を着た美少年が堂の椽に並びそれに月が照して居る所は如何にも美しい景色である。佳い句ぢや。

名月や鶴脛高き遠干潟

海岸に於ける中秋の景色を叙したので、名月が照してゐる、打見ると向ふは遠い干潟で汐が引いてゐる、其處に鶴が立つてゐるが、沙のない爲めに脛が殊に高く見ゆるといふ景色ぢや。中七字の爲に遠干汐の趣がよく現はれて鶴の白いのを明月が照すところは皎潔なけしきで頗る感じがよい。

名月や我を筆架の影ほうし

頗る解し難い句ぢや。想ふに名月がさして自分の影が筆架の上へ落

ちてゐる、それを我と我が身を筆架の影法師で見つゝあるといつたのであらう。筆架の如き小さきものゝ上に我影が落つるといふは少し不釣合なやうぢやが、察するに自分の影の机上に落ちたのを折ふし筆架があつた爲め、恰かも筆をもたせたやうに我影が横はつてゐると見なして興じたのでもあらうか。

名月や我家にもこる門徒坊

名月が皎々としてかゝつてゐる、折から我宅へ歸る門徒坊があるといふので、門徒坊は妻子などを持ちてごことなくなま臭い宗旨ぢやが此のなま臭いものを清い月に配合した處も、亦た一種の名月の趣である。

消息

・ 水あふらなくて寝る夜や窓の月

或人へ消息とした句。

佗しい生涯の事なれば行燈にたく水油の貯さへも無く灯もともさず
に寝る夜ぢや、折ふし窓には月がさして居申候と言ので、油もなく灯
もつけずに寝るなど人に申遣すは貧を歎くが如くなるも、其實は貧
に安んじ却つて其の境界を氣樂に思ふので、灯もなく月を見つゝ安
らかに寝に就くを寧ろ誇つたのである。

柴の庵と聞けばいやしき名なれども世にこのもしきも
のにぞありける。此歌は東山に住みける僧を尋ねて西
上人のよませ玉ふよし山家集にのせられたり、いかな
るあるじにやとこのもこくて或草庵の坊につかはしけ
る。

柴の戸の月や其儘阿彌陀坊

柴の庵と聞くと賤しい名ではあるが、世の中でこのもじいものは柴の庵ぢや、といふ歌は京都東山に住んでゐた庵を尋ねて行つて西行上人が詠むた歌なので山家集にのつてゐる。如何な主人がかゝる庵に住むのか、さてこのもじい事ぢやと思つて、或る草庵に住み居る坊主におくりつかはしたといふ前書で、其の坊主は委しく知らぬ人乍ら草庵をこのもしく思ひ従つて主人も心にくき人だらうと思ひ遣つたのであらう。

柴の戸に照らしてゐる月は其儘とりも直さず阿彌陀である。其阿彌陀の坊ぢやといふので、坊の名は別にあつたらうが、月の光りより阿彌陀の光りを思ひ浮べ遂にそを坊の名として興じたのであらう。充分に意味のわからぬ句ぢや。

石山に詣でける道

橋桁のしのふは月の名残かな

石山は例の江州の名所。

橋を通つた所が其橋には桁の古いために葱が生ひてゐる。曾て名月の夜にも此の葱は打そよいでゐたが、今も其月夜の趣が此橋此葱に残つてゐるといふので、其時にも月はさしてゐたらうが名月のやうな特別の光りでもない所から斯様に叙したのであらう。

旅窓の長夜

ここのたひ起ても月の七つかな

旅の宿に於て秋の長き夜に逢つた心持を叙したので、宵から寢て既に九度も目がさめて起きたが、併し月は尙ほ七ツ時の月で、即ち今の午前四時頃の月であると言つたのぢや。老年になり氣體も衰へた人の秋の旅寝の様がよく現はれてゐる。且芭蕉翁は小便も近かつたの

でらう。呵々。

深川

名月や門にさし來る汐かしら

深川は東京の深川で、其頃芭蕉の久しく庵せし所、其處の趣を叙したのぢや。

名月が照してゐる、其の門には沖から寄する汐頭が來る、といふので、洲崎あたりの海岸にでもありさうな最色であるが、或は川へさし來る汐で、海を多少はなれてゐる處のけしきと見てもよい、兎角門前迄汐がさして來てそれを名月が照らしてゐると見れば景色は充分ぢや。一誦して己も其境に立つ心地がする。

柱は杉風松風が情を削り、住居は曹良岱水が物數寄を
侘、なほ明月のよそほひにと芭蕉五もとを栽るたり

はせを葉を柱にかけん庵の月

これは深川の庵の時の句。其庵たるや柱は杉風と松風が情けで削らせくれたもの、又た住居の間取などは曾良と岱水が物數寄で侘しく物してくれたもの、其上に向は名月の時のけしき粧ひにもと思て五本の芭蕉を庭に栽るた事ぢやといふ前書で、芭蕉老人頗る得意のさまが見ゆる。文章も頗る曲をつけて情を削るとか物數寄を侘ぶるとかなかなか洒落て書いてゐる。

アノ庭の芭蕉の葉でも一つ折取つて柱にかけたら面白からう此の庵の此好い月夜に於ては、といふだけである。蓋し五月に葵をかけるといふ故事がある所から思ひよせたのであらう。又た景色と見ても芭蕉の葉を月下の柱にかけてあるなどは心持のよいものぢや。

深川の末五本松といふ所に舟をさして

川上と此川下や月の友

川で明月に乗じて舟遊をした趣で、先刻出た川上と今ま來てゐる此の川下とに於て月の友となつて遊ぶ事ぢや、或は上流に或は下流に舟をやりつゝ月を賞して居るといふ意である。月を友とするを月の友と言ひ替へたのは調子の爲めであらうが一寸面白い。

いさよひはわすかに闇のはしめ哉

十六日の月は、月の出る迄に少し時間があつて闇がある、其の暫しの闇はこれより闇になりゆく其の初めであるといふので、是れも理窟を深く見ずにいさゝか闇であつた其瞬間を打興じたと見る可さぢや。

嵐蘭初七日詣墓

見しやその七日は墓の三日の月

墓参をした其時に月が出てゐたのを見て咏じたのを見ゆる。見しやは先頃見しといふに調子をつけてやと置いたので、その七日とは初七日の事、此時に墓にさしてゐる月は先頃見し其の三日の月であるぞよ、曾て嵐蘭お前さんと三日の月を眺めた事があつたが、其の三日月が今日お前の初七日の晩にお前の墓にかゝつてゐる、是れを見る自分は轉た今昔の感に堪へぬ、と師弟の哀情を叙したので、七日と三日が文字上の配合となつてゐる。

東順傳

入月のあこは机の四隅かな

東順は晋其角の父で、初め醫を業とし老いて市井に隠れて吟花嘯月を事とす、其の死後芭蕉翁其傳をものして末尾へ此句を書きつけたのであるさうな。

月が出てゐたのが既に西に入つてしまつて其のあとは机の四隅が残つてゐるのみぢや、即ち四角な机が残つたばかりぢやと言つたので机の四隅とは月が入つてはのくらき所に机のみあるを指したので一寸面白い言葉ぢや。句の表面はそれ丈けの事であるが、裏面には東順の死を入月に比し、今は唯だ其人の文事上に心を置きし噂のみ残るやうになつたといふのを、机といふ字で暗に現して居るのであらう。併し此句には尙故事などもあるの歟。

借水亭にて

影まぢや菊の香のする豆腐串

影待は月かげのさすを待つといふ事。月を待つてゐる間に菊の香ひのする豆腐串があるといふのぢやから、其時田樂でも喰つて居たのであらう。實際に其串が菊香を持つてゐる筈はないが、庭に菊あり、

豆腐を下物に月を待つてゐる、月のぼらば庭の菊にも月影さすべし、といふ心持を個様に委曲に言ひ做したのぢや。或は又た串が普通田樂の竹串に非ずして古菊の幹などを削つて月ひたものとせば、菊といふに一層深き關係を持つ譯ぢやが、何等の前書なしにソんな事もなからう。

伊賀の山中にて二句

名月の花かこ見えて綿はたけ

これは客觀の景色を主觀をかりて叙したので言葉も亦た少し入組んだ叙法を用ひてゐる。明月の照らしてゐる場合に於ては綿も花の如く美しく光つて見ゆる、サテも好いけしきの綿畠ぢやと歌つたのである。若し名月の花と言つた爲め月が綿の上に花のやうになつて見ゆるとせばこの字に重きを置き過ぎたので、此處の字は唯だ下文

への關係詞と見ればよいのぢや。

名月に麓の霧や田の曇

名月の夜に山の麓の方は一面霧が鎖してゐる、それが田の曇のやうに見ゆる、といふので、秋月の夜などよく見る景色を其儘を叙したのである。

藁出庵にて

今宵たれよし野の月も十六里

今宵たれは今宵誰れが歩行いてゆく事ぞといふを略したので、後の十二字に至り自然とそれが分かるのぢや。即ち吉野の里へ行く道のりは十六里あるが、其十六里を今宵月下に歩み行く人は誰れぢやいなど、此庵と吉野の間が十六里なるより打興じたので、吉野の里もと言ふべきを吉野の月としたのが詩的文章の活用ぢや。新古今集に吉

野についてこよひ誰れ云々の言葉の前例がある由。

住吉の市に立ちて

升買て分別かはる月見かな

住吉の市には升を賣ると見ゆる。其升を買つたので自分は俄かに分別が變つた此の月見の晩に於てと言ふのぢや。即ち月を徒らに何の氣なしに眺めてゐたが升を買つて見ると得失も心にうかび今迄のやうに漠然として世を送る事もなるまじ、一番揮を締て見ようかといふ氣になつたと言ふのである。斯く言へば全く俗物になり了つた如くに見ゆるが、其實故意にとぼけて其時を興じたのに過ぎぬ。

畦止亭題月下送兒

月すむや狐こはかる兒の供

畦止亭といふ所で月下に兒を送るといふ題で作つたといふ前書。

月は空にかゝつて皎々と澄み渡つてゐる、其處をば狐が出るかゝと恐れ乍ら兒のお供をして行く事ぢやといつたのである。野原の廣として狐でも出さうな所を或山寺などへ歸る兒を送る事に見立てたので怖がるは供の人に重にかゝり兒も亦た怖がる、主従共に怖がり乍ら淋しく月下を行くふ心持と其の景色とが充分に現はれて感のよい句ぢや。

其櫛亭にて

秋も早やはらつく雨に月の形

秋の季節も早やはらついてゐる雨夜で、月の形ちも闇い物すこいやうな趣になつてしまつた、といふ即ち暮狀の趣で、嘗て晴渡つた空に明かに懸て居た月に思ひ比べて、時候の過ぎゆく感懐を叙したのである。

名月や池をめぐりて夜もすから

名月の照してゐる夜に或る池の周圍をめぐりて夜をあかしたといふので、一輪の明月は池に落ち、夜更け人静まり、四邊閑寂なる趣も自然に言外にあらはれて、讀者亦た其の池邊にさまよふかの思ひがする。

山寒し心の底や水の月

山の中に池があつて其池に月さし、其影が水に落ちて底に沈む如く見える、さうして其のあたりは寒さを感じる、といふのを主觀を交へて咏じたので、即ち山が静かに寒いけしきである爲めに、人も心の底に水の月がある如くに覺ゆる、と言つたのぢや。其實池底に月の澄むのであるを我心の底にある如く見なして客觀を斯く主觀に言ひ、且つ其客觀が人の心底に徹する氣味であることを訴へたのであ

る、随分巧みな叙法を用ひたものぢやが少し理窟臭い。

わか宿は四角なかけを窓の月

我家に於ては四角な影を窓の月が落してゐるといふだけで、窓が四角な爲めにそれより月かさして疊にうつる其影も亦四角なから斯様に戯れて言つたのである。

かけ橋や先つ思ひ出つ駒むかへ

木曾の棧橋に来て立つた時には先づ思ひ出でらるゝは駒迎の事である、彼の陸奥より引つれて都へ出る駒が此の棧橋を過ぐる時は如何な趣であらうかと床しく思ひ出られる、棧橋に來りて第一番に此事を感じたといふので、成程谷あく迄深く溪水の勢強く流れてゐる其上に高く架せし橋へ駒を引き連れて渡るけしきは畫にもしたき趣であらう。

棧橋や命をからむ葛かつら

棧橋は葛かつらがからみついて出来てゐる、其橋を渡る者は此の葛のからみついてゐる爲めに命も安く向岸に渡り得るので、恰かも葛かつらが人の命をからみ止めてゐるやうぢや、と言つたので、葛かつらにて棧橋をからみ作つてゐるといふ客觀を、命をからむといふ主觀で現したのである。併し此の着想は餘りに巧に失して前の棧橋の句に比すると數等も劣つてゐる、而かも後世の多くの俳人は皆な此句の方を佳句とし尊んだに相違ない、其證據には自分が曾て木曾旅行をして此の橋に來た時に、棧敷の傍に碑があつて此句を彫付けてあるのを見た。若し余をして石を建てしめたら一も二もなく前の句を彫りつけるのである。俗俳人は美的趣味を解せず、徒に巧を弄して理窟臭い句を好からぢや。地下の芭蕉翁は定めし懇蹙してゐるであ

らう。尙又た芭蕉翁が此橋を通つた時はもはや葦かづらの橋ではなかつたらうが、それを昔の姿で言ふのが詩的手段ぢや。余の通つたのは明治の初年であつたが其時は既に疎末ながらも石の手丈夫な橋が架つてゐた、此節は鐵の釣橋にもなつたであらう。左すれば命を築く石、否命を鍛ふ鐵とでも歌はねばならぬ。

芳野夜泊

碓打て我に聞かせよや坊かつま

芳野で宿つたといふ前書で、こゝも泊の字を使用してゐるのは間違ひぢや。

碓を打つて其音を我れに聞かせて呉れよ坊の妻女よといつたので、吉野には妻ある坊がある處より、其の妻の碓の音は又た普通の女の碓の音とは變つた珍らしい趣があらうから是非一つ聞きたいものぢ

やと打興じたのである。芳野あたりの秋といふ事を坊の一字でよくあらはしてゐる。

聲すみて北斗にひとく碓かな

碓を打つ音がすみくして恰かも北斗星にまでひゞき渡るやう思はれると、秋夜の碓音につき一種の理想を叙べたのである。北斗にひゞくとは一寸奇想ぢや。

猿ひきは猿の小袖をきぬた哉

猿曳は猿まはこの事、其の猿まはしは猿に着せる小袖を碓に打つて作る事であらうと思ひやりて、一寸打興じたに過ぎぬ。何となく哀はれにをかしい句ぢや。

千里か舊里にて

綿弓や琵琶になくさむ竹のおく

千里といふ人の舊里で作つたといふ前書。綿を弓もてびん／＼と打つてゐる家がある。其音が琵琶かと聞きなされて心を慰める事ぢや。其の音は竹籥の奥の方でして居る。といふので、琵琶に慰むは琵琶として心を慰めるといふ意味である。

廉牧亭にて

蔦植ゑて竹四五本のあらし哉

蔦を植ゑて竹へ纏はしつけてある、其の竹が四五本で、それに嵐がさや／＼と渡つて動かしてゐるといふ景色である。竹四五本は矢張り根のある籥竹で、それに蔦が纏つてゐるのであらう。蔦植ゑては只今植ゑた如きも其實は蔦が植わつてゐるといふ位の意。僅か四五本の疎な竹に蔦のまどうて竹と共に風に動かされてゐるのは如何にも清い感じのする景色である。

野の宮の鳥居に蔦もなかりけり

野の宮は嵯峨の齋宮の場所で、今は名残の形ちのみ残つてゐる。其野の宮に鳥居があるが、其鳥居には蔦も纏つて居ぬと言ふので、神の瑞籬といふ所から古く寂ひでゐながらも蔦などは纏はず清淨に神しく見ゆるといふ意ぢや。此處のは黒木の鳥居と云ひて削りもせぬ荒木の鳥居ぢやから自然個様に興じたのでもあらう。

蔦の葉はむかしめきたる紅葉かな

蔦の葉の紅葉したのは今様でなく何となく昔しめいた紅葉ぢやといふだけの事。成程他の紅葉よりは古風な所があるやうぢや。

鬼灯は實も葉もからも紅葉かな

鬼灯は其の實も葉もそれから實を包むでゐる殻らも悉く紅葉してゐる、總て紅葉盡しの草ぢやと興じたのである。順序よりいふと實よ

り其のからを云ひそれより葉といふ可きを却つてからより葉を先きに言つたのは調子の上から顛倒したので、初心者の叙法の上につき注意すべき例である。

よし野にて

御廟年を経てしのふは何を忍ぶ草

よし野は南朝の皇居のあつた所、御廟は後醍醐帝の廟ぢやと一本に前書がある。句意は其御廟が多く、年を経たの其處に生ひてゐる葱は何事を忍べる忍ぶ草であるかと、葱といふ名の上から昔を忍ぶに思ひよせて斯く叙したのである。しのぶを二度使つた所が言葉のあやで趣を添ふる所以ぢや。且又た上を七音に言つた所は頗る鄭重にして御廟などの莊嚴なものに對して相當した重々しい調子である。

母の白髪をおがみて

手に取らは消ん涙そあつき秋の霜

母の白髪を手に取つて拜むといふ前書。尤も一本には長い文があつて久々故郷へ歸り、兄より此物を示されたので作つたといつて居る。其白髪を手に取らば消えてしまふだらう、これに對して自分の注ぐ涙はあついでいから、秋霜の如き此白髪は形を留めまい、サラバ手に取る事も出来ぬと言つたのである。要するに理窟臭く且虚栗の時代の調子であるから詩として面白くも思はぬ。尤も倫理上では同情。

初茸や未だ日數經ぬ秋の露

初茸を見ると未だ日數のたぬ秋の露が置いてゐる、未だ秋も初めにして深くならぬと云ふ趣が初茸の初の字とよく調和してゐる。

松茸やしらぬ木の葉のへはりつく

松茸を見ると何んであるか知らぬ木の葉がへばりついてゐるといふだけであるが、吾々なども茸狩の時に於てよく見る事實で一寸興があるのみならず、松茸其物をもよく面白く現はして居る。殊にへばりつくなど俗語を思ひ切つて使用したので松茸が目に入るやうぢや。

松茸やかふれたほは松の形

是れも松茸を見て興じたので、松茸のかさのかぶさつたやうになつてゐる所が、松の木に似てゐるといふのぢや。彼の松の繪など書くときに傘の如く書いたのがあるが。松茸が全くアノ形ちと同様ぢや、松茸とはこれより得たる名なりけりと洒落たやうな心持で、松茸といふより松の木といふ比喻を取り暗に人の親子の相似たやうに言ひ做して打興じたのである。

茸狩やあふない事に夕時雨

茸狩に行つた所が、アブない事に今少して夕時雨に逢ふ所であつたに、マアノ無難で早く引上げお互ひに濡れずに相濟みました、實に僅かのちがひで大變な目に逢ふ事でした、ハツノといふやうな所ぢや一寸可笑しい。

怨水別墅

籠り居て木の實草の實拾はとや

此家に久しく籠つて居て、人にも接せず、唯だ朝夕木の實を拾つたり草の實を拾つたりして暮して見たいものぢやと言つたので、山がかつた静かな別墅の景色が想察される。

木曾の橡浮世の人の土産かな

木曾の橡實は浮世の人の土産になる、木曾山は浮世に遠ざかり橡實

も浮世にはなれて出来てゐる、それが却つて浮世に出てもてはやされる」と打興じたに過ぎぬ。

李山去來の二人に

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

蒟蒻を食つたり柿をかぢつたりして誠にうれしい事ぢや此の草の庵ではといふので、二つながら幾分かわびた品物である所より斯く云つて、暗に李山と去來とを愛重しお前等と共に遊ぶのはうれしいと言ふ心持をほめかしたのである。

片野望翠亭

里ふりて柿の木持たぬ家もなし

此里は古い里ぢや柿の木のない家は一つもなく、家として柿を植ゑざるなく、柿の木を所有せざるなし、と言つたので、多分片野とい

秋
の
部
(一四一)
ふ地が柿の名所であつたのであらう。兎に角に客觀の秋の村落の景色が明かだ。ふりての三字がこゝには最適當して此の一言の爲め全體が引立つて見える。

しふ柿や一口は喰ふ猿のつら

澁柿を澁いとは知らず一口だけは喰つた、其の時の猿の面と言つたらない奇怪な面をした、實に可笑しかつたと興じたので、一氣阿成に出来て、如何にも猿の面貌が躍然として目に入りて来るやうぢや。但し一口はが少し理窟に傾いたかも知れぬ。

堅田森瀬可休亭

祖父と親其子の庭や柿みかん

江州の堅田といふ地の森瀬といふ姓の可休と號する人の亭でといふ前書ぢや。

可休の家は既に三代も續いたと見え、曾て祖父の庭だつたに又た親の庭となり、而して更らに今は其子の庭となつて、柿や蜜柑が澤山に出来てゐる、誠に結構な目出たい事ぢやと折ふこの節物たる菓實によりて其の住居の様をあらはし更に其家の繁榮をも稱へたのである。尙ほ又た一方から見ると可休の家は家族が大勢で、祖父と親と其子と三代とも今に生存して居て、其庭に柿蜜柑が澤山に植ゑられ、充分に喰つて皆な樂しく平和に暮してゐる、とも解せられる。併し祖父と親、其子の庭やと段取て言つた處より察するに多分前の解の方が穩かだらうと思はれる。事實は如何。

橙や伊勢の白子の店さらし

伊勢の白子といふ地で見たと所を其儘に叙したので、白子の或店に橙がさらされて古くなつてゐるといふ景色。橙が少し斗り店の隅など

に賣残されて、からびてゐる所などは一寸面白い見付處で、店さらしと言つた所に此句の生命がある。

何喰て小家は秋の柳かけ

道ばたを見ると折しも秋の散りかけた柳の陰に小家がある。如何にも佗しく淋しげに見受けられる、さても此の小家の人は常に何を喰つて世を渡つてゐるのか、斯かる家に住みても常に何かは喰つてゐる事だらうが、今頃は何を喰ふ事かと言つたのである。何喰ふてと言ひし爲めに如何にもわしい小家といふ事が目に入るやうで、秋の散柳の景とよく調和してゐる。

秋を経て蝶もなめるや菊の露

秋を経て次第に月日が立つ事ぢやが蝶も菊の露をなめて尙ほ遽々として飛んで居る事で、蝶は春からの虫ぢやが尙秋の更くるまでなが

らへ居る、其生命は菊の露を嘗める御蔭であると、暗に南陽菊水の古事を思ひ遣つた趣向のやうに思はれる。

草庵の雨

起あかる菊ほのかなり水のあこ

草庵は深川の庵でもあらうか、兎角其頃雨ふりて溝渠など溢ふれ出でて庭に出水した跡の眺めと見える。今迄水に押されて打臥して水中に沈んでゐた菊が、漸く水が引いた爲め起き上りはしたものとまだ全く水を離れ得ず、ほのかに即ち有るか無きかに見えて居るといふのぢや。出水のあこの庭の趣として一寸面白い見付け處である。

左柳亭にて

早くさけ九日もちかし宿の菊

早くさきなさい最早九月九日重陽の節句も近かいのぢや。此宿の菊

さんはどうして居るのか、と言ふ位の事。

蓮池の主翁また菊を愛すきのふは龍山の宴を開きけふ

は其の酒のあまれるをすくめて狂吟たはふれとなす猶

おもふ明年誰れかすこやかならむことを

いさよひのいつれか今朝に残る菊

蓮池の主翁といふから大方蓮池があつて蓮を愛して居たので、素堂の事らしい。其主翁が又菊をも愛して、菊の花壇を作つて居たと見える、昨日は龍山といふ所に宴會を催し、今日は又其の酒のあまつたのを人々にすくめて、狂吟をして戯れ遊ぶ、尙ほ明年は此の宴に連なる人の内で誰が健在するであらうかと思ひも遣つたといふ前書で、ツマリ此の菊の宿の酒を飲む一座の者は定めし來年もながらへ得るであらうと言ふのを疑問の言葉ではのめかしたのであらう。い

さよひは十六夜の事で十六夜の月は、朝まで残る所より菊の残るに思ひよせて、此のいさよひの今朝まで残る菊はどれぢや、いづれであるぞといふ意、蓋し此會が九月十六日頃にあつたからでもあらう。而して裏面には前書の通りの意をほめかしてゐるのである。餘り感心した句でもない。

山中の温泉にて

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ

山中では菊は手折らぬ、湯の香ひがしてゐるといふだけの事ぢや。或は湯の匂ひがすると何故に菊を手折らぬかといふ者があるかも知れぬが、何も左様な理窟のあるわけでなく、唯だ山中を通つた、菊があつた、其菊は手折れなかつた、折から湯の香がした、といふ實況其儘を言つたのが詩興である。穿鑿すれば既に温泉に入り養生するか

ら菊を手折つて長壽を希ふ必要はないとか、又温泉の匂ひの爲め肝心の菊の芳香が奪はれて居るからそれを手折てもつまらぬとか、色説の付かぬこともないが、總て無用の論辨であらう。

如何亭にて

瘦なからわりなき菊のつほみ哉

アノ菊は瘦せて居ながらも苔みを持つてゐるが其様が如何にもいたはしく見えて即ちわりない事よと言つたのである。

菊の露落ちてひろへはぬかこ哉

菊が咲いて露が落ちた、其露を拾はうとしたら豈に圖らんやぬかこであつたといふので、ぬかこは蔓になる小さな芋で露ほどの大きさもある所より斯く言つたのであらう。併し其實露を拾ふと云ふ狂人もない筈ぢやからツマリ菊さいて露こぼれる、傍にぬかこもあつ

た、といふ客觀に過ぎぬ。それを斯様に曲をつけて言ひなしたが一種の興で、多少の滑稽味を帯びて氣輕な處の見える句ぢや。

田家に舍る

稲こさの姥もめてたし菊の花

稲をこいてゐる姥があつて其傍に菊の花が咲いてゐる、菊花の爲めに姿も亦ためてたく見ゆるといふだけの句ぢや。

堅田の何かし木既醫師の兄の亭に招かれしにみづから

茶をたて酒をもてなされける野菜八珍のうち菊花なま

すいと芳しければ

蝶も来て酔をすふ菊の膾かな

江州堅田の何かし姓の木既といふ醫者の兄の宅へ招かれて行つた、處が兄者人は自ら茶をたてて飲ませ酒を御馳走してくれた、其時に

野菜の八珍の中に菊の膾が殊更ら芳しく出来てゐたからといふ前書。八珍は必ずしも八種あるではなく、之を賞賛した詞ぢや。

菊の膾の芳はしい爲め蝶もやつて来て其膾の酔を吸ふたといふだけの事で、菊なますといふより蝶といふ配合を持來り、蝶が吸ふと言ひて暗に自分のそれを喰べて御馳走になつた事を揆揆したのぢや。

九月九日乙州か一樽を携來りければ

草の戸や日暮れてくれし菊の酒

九月九日の重陽の節句に弟子の乙州が一樽の酒を持つて尋ねて來たからといふ前書ぢや。

草の戸に日が暮れた、折ふし人がくれた菊の酒があると言つたので九月九日の事ではあり、草の戸の佗しく住みなして日も暮れかゝるア、酒でも飲みたいと思つてゐる矢先へ、恰かも好く酒を持つ來て

くれたのだから芭蕉翁頗るうれしかつたと見る、日暮れと菊の酒とはよく調和して何となく趣味がある、又暮れてくれしの續き方も自ら口調に叶つて居る。菊の酒は菊で作つた酒にあらず、九月九日の菊に對して飲むより菊の酒とは言ふなり。

見處のあのやのわきの後の菊

見處はアソコぢやアソコとはアノ家の側の重陽を過ぎた後の菊ぢや、アノ菊はをかしく咲いてゐて誠によい眺めぢや御座らぬか、と言つたのである。

八丁堀にて

菊の花さくや石屋の石の間

菊の花が咲いてゐる、石屋の夥多置いてある石の間に咲て居るといつたのぢや、成程石屋の石の間に菊のさいてゐるのは亦た一種かは

つた景色である。

大門通を過るに

琴箱や古物店の背戸の菊

江戸の舊吉原の大門通を過つたのであらう。人形町と平行した東の町ぢや。

古物を賣る店があつて、其家の背戸には菊が咲いてゐる、其背戸に傍ひて琴を入れた箱が目についた、其處で琴箱やと言ひ起して斯様に叙したのぢや。琴箱は一寸菊花との調和が好い。且吉原の舊趾としての感も多少寓してゐるらしい。

園女亭にて

しら菊の目に立て見る塵もなし

白菊を見るに人の目に立つほどの塵もなく如何にも清く氣高く咲い

てゐるといふので、表面には園女亭のけしきを譽め、而して裏面には園女の人物を白菊に比して讚美したのは勿論である。

奈良にて二句

菊の香や奈良には古き佛達

奈良へ行つた時に折ふし菊の花咲く季節であつたから菊の香やどうたひ起し、其の菊の香のする奈良には古い佛達が澤山御座ると言つたのである。奈良は古都にして古刹多き地なれば、其地と菊の香の配合に趣を感じて此句を成したので、頗るよい感じのする句ぢや。

菊の香や奈良は幾代の男ふり

同じ季節の菊の香やどうたひ起して前の句とは異なつた配合を持つて來た。奈良の土地は幾代も経た男ふりが見ゆる。即ち古都の事にしあれば何處となく其の風俗も残り居てそゞろ昔しが偲ぬばれると

いふ意ぢや。男のふりのみか女も其他住居も器物も萬端が昔しめいて見えたのであらうが、特に男を引出した處が前句の佛と同じく菊花の配合上に好いのである。

くらがり峠にて

菊の香にくらがり上る節句哉

菊の香ひをきくつゝ聞がり峠を次第に上つてゆく、折柄其日は節句の日であるといふので、名のくらがりといふよりして暗中に思ひ寄せ、爲めに菊の香が一層いちじるしく感じた心持を現はして居る。

生玉邊より日を暮して

菊に出て奈良と浪花は宵月夜

此句は奈良を立て大阪へ入る時の句であらう。即ち菊を賞する爲めに出遊して所々の眺めもしたが、奈良でも宵月夜を賞し、浪花でも亦

宵月夜を賞することになつた、といふのを態と言葉を錯綜させて斯様に叙したのぢや。

菊花の贊

折ふしは酔になる菊のさかな哉

折ふしは酔にもされる菊、其菊のさかなかなと歌つたので、菊は唯だ色香を以て人をなぐさむるのみならず、時には酔あへとなつて酒の肴にも成り、目の外舌をも娛ましめる事ぢやといふのである。芭蕉翁は餘程菊脍が好物であつたと見ゆる。

江上の破屋を出るとて二句

野ざらしを心に風のしむ身かな

江上の破屋とは江戸の住居といふ程の事。

此句は全體に客觀も交へてあれど主觀の方が重もになつてゐる。野

ざらしは野にされた人の骸骨の事。そこで自分は是より旅に出るのであるが、折ふし時は秋に際してゐる、行手は如何様な有様であらうか、最早や老年の身は旅をしてゐる内に何處の野邊で斃れ死して一片の骸骨となるかもしれぬ、ア、骸骨の事を思ふと心の内まで秋の風がしみ込むやうな今の身であるわいと感慨したのである。併し其の野ざらしとなるを眞實心に恐れるにあらで、却つて其れが面白からうと興じたのぢや。

秋十とせ却つて江都をさす故郷

支那人の詩に并州の客舎に十年を経て、常に歸りたいと思つて居たが、愈々其地を去ることとなつて、桑乾の水を渡るに臨んでは住み慣れた并州に心が残りて故郷の如く思はるゝといふのがある。此句は全くそれより來たものぢや。秋十とせは即ち十年の秋を過じ

たので、今ま江都を出で、故郷の伊賀に歸るのであるが、却つて今の心は江都を指して故郷の如く思はれ甚だ別れるのが惜しく感ずると云つたのである。

憐捨子

猿を聞く人捨子に秋の風如何に

捨子がしてあるのを憐むで作るといふ前書ちや。一本には長い文が綴つてあつて、富士川の邊りで見た事實としてある。

彼の哀猿を聞いて斷腸の思ひをなすとは久しく詩人の口により歌はれたる所ぢやが、其の猿を聞いて斷腸する人は此捨てられた子に秋風の吹く場合の感は如何であるか、定めし其のあはれさは猿の鳴く位の事ではなからう、と疑問體に作つたのである。前の句も此句も皆を虚栗の口吻が残つてゐる。

義朝の心に似たり秋の風

芭蕉が旅寢を重ねて青墓の邊を通つた時の句と思はれる。青墓の宿は昔し源義朝が平家の軍に打まかされ都を落ちて茲處迄來た時に、子の朝長が深手を負ひて共に従つて逃げる事が出來ぬ、それを棄て置いて逃げれば敵の手に殺されるから、イツソ親の手で殺してやらうと、自ら朝長を刺し殺して落ちのびた所である。其時の義朝の心持を思ひやつて、嘸ぞ悲しかつたであらう、今ま茲處に吹いてゐる秋風が恰かも義朝の其時の心持に似たやうに悲しげである、と言つて、懷古の情感を陳べた句である。

秋風や藪もはたけも不破の關

不破の關所跡の句で、其昔しを思ひ出て作つた句と見える。即ち藪も畑も皆な秋風が吹いてゐる、其の藪や畑の所が昔しの不破關であ

つたのぢやと言ふに過ぎぬ。

身にしみて大根からし秋の風

大根を喰ふと如何にも辛い、それが身にしみやうであるし、又た吹いてゐる秋風も身にしみやうに冷たい、大根の辛いのも、秋風の冷たいのも共に身にしみ秋であるといふので、文章上は身にしむの語は大根のみにかゝるのであるが又た餘意として同時に秋風にもかゝるのである。

一笑追善

墳もうこけ我泣く聲は秋の風

墓も動き出でよかし、我が此の墓の下に居る人に對して泣く聲は眞からかなしく思つて泣くのである、若し幽明互に感あらば必ず墓が動き出でて其の人も泣くであらう、況て折ふし秋風が吹いてゐる時

である、と自分の悲哀の情味を更に秋風に配合したのである。上の十二字が如何にも思切つて言つてあつて、其感情を充分に盡した句ぢや、或いは我泣聲が秋風の如しと解せられるかもしれぬが、斯く言つては却つて真情を損ずるかと思ふ。

途中

赤くこ日はつれなくも秋の風

赤々と眞赤になつた夕日は人につれなくも今ま西に入らうとしてゐる、其折柄秋の風が吹いてゐる、と言ふので、秋の夕ぐれの物かなしく淋しい所を叙するに入目を擬人的にした句である。つれなくは秋風の方へも多少關係して居るやうぢや。

牛部屋に蚊の聲細し秋の風

牛を繋いだ小屋に蚊の聲がしてゐる、而かも弱々と細くかすかに鳴

いてゐる、折から秋の風が吹いてゐる、夏ならば元氣よく聲をたてて牛部屋に限らず人家にも入り来る蚊が、今は早や秋風の冷たき故牛部屋のやうな小暗らき隅の方で小さな聲をしてゐる事ぢや、といったので村家の秋暮の景色を叙し得て一種の趣味を感じる。

那谷観音にて

石山の石より白し秋の風

山中の温泉に行くほど白根か嶽跡に見なしてあゆむ、左の山際に観音堂あり(中略)那谷と名付く(中略)奇石さまざまに古松植並べて萱ぶきの小堂岩の上に作りかけたり云々と芭蕉翁の紀行中に在り、越前國にある観音と見ゆ。

江州の石山の石は白い石であるが、其石よりも此處の石は白いかと思はれる、此の秋の風の下に於ては、といふので、石山にも観音あ

り、此家も観音のある所より、又た石山も石多く此處も石多き所より江州の石山を連想しそれに比して秋風の吹いてゐる此那谷の景色が更に哀れに感ずると言ひ、尙裏面には石山の靈場にも劣らぬ有難い地ぢやと言つたのであらう。又一解は石山とは此那谷の石山を云ふので石山の其石よりも秋風の方が白く思はれると歌ひ、風に色なきも石の上を吹き渡る處から其白さを風に歸し、風の色が更に石の色より白いと理想を馳せたものと見るのぢや。孰れが可なりや、否や。

贈桃天號

桃の木の其葉ちらすな秋の風

或男に桃天といふ號を贈るについて此句を添へて與へたといふ前書。桃の木の其葉を散らさぬやうにせよ此の秋風の吹く頃には、油

断せば秋風に散られるから、氣をつけて居よ、と表面には言つて、裏面には我が教へに背かず名を落さぬやう此道に勉強せよとほのめかした位の事ぢや。

中村を過ぎて

秋の風伊勢の墓原なほ凄し

中村といふは伊勢の國である。それで秋風の吹く其時は伊勢の國の墓原は尙更らすごく哀れに感ぜられる、とその時途中の感懷を叙じたのである。尤伊勢の御息所などへ思ひよせた處もあらうか。

秋風の吹こも青し栗の毬

秋風が吹いても矢張り青い儘であるアノ栗の毬はと云つて、秋風には多くの青いものも皆な色あせて黄に變ずるが常であるに、獨り栗の毬は秋風にめげもせず依然として青々とした色を保つてゐると言

ひ、毬といふより何となく強硬にも秋風に抗してゐるやうな心持をうたつたのである。勿論栗の球と雖も遂には色の變ずるものであるが、唯見た時に青くば何時迄も青いと見なして咏ずる處即ち詩人の興で、此際智識がましい事實の問答は一切無用ぢや。

座右銘

ものいへは唇さむし秋の風

自分の座右の平常から戒め心得として書き置く言葉が座右銘である。

物を言ふと唇が寒く感ずる秋風の吹く時には、といふだけの事。若し單に詩的感情を現はしたとすれば、物を言つた、其時に唇に寒さを覺えた、折しも秋の風が吹いてゐた、といふ即事に過ぎぬのであるが、既に前書ありて訓戒の爲めに作つたとあるからは、沈黙を守

れ、饒舌を弄ぶな、餘計な事をしやべると唇が寒いやうに禍に逢ふぞよ、口は禍の門といふではないか、と解する外はなからう。而かも之と同時に詩としての價は零に歸した。

暮秋のけしきを

秋風や桐に動いて蔦の霜

秋風が吹いてゐる、此秋風は先づ桐の木の梢に動いて桐の葉を落し盡し、それから又蔦へ向つて吹き蔦の葉に霜を置かしむることになつた、といふので、秋風其物のはげしい處と、其周圍の段々荒れて淋しくなり行く景色と、を叙したのぢや。

伊勢紀行の跋

西東あはれさ同じ秋の風

伊勢紀行は向井去來の書きし文、それを江戸に居た芭蕉翁に示した。

翁は其の跋文を書いて終りに此句を書きつけたのである。

西へ行つても東へ行つても、哀れさは同じ事ぢや何處へ行つても秋風が吹いて居る、といつて紀行文中の風雅と己が此地の風雅と同調であると賞賛したのである。

悼松倉嵐蘭

秋風に折れて悲しき桑の杖

秋風に吹かれて、折れてしまつて悲しい事になつた、此桑の杖よ、と歌つたので裏面には嵐蘭は才子にして自分の弟子中でも杖柱と頼んで居たに、秋風吹て忽ち死んでしまつた、自分は杖を失つたやうな氣がしてガツカリした、悲しい事ぢやといふ意を現はしたのでぢや。桑の杖とは桑の木で作つた杖であらう。或は桑の木の支柱の事か。

野水が旅行を送る

見送りのうしろやさひし秋の風

今まお前を見送つてゐるが、見送られてゐるお前は後の方が嘸ぞ淋しい氣持のする事であらう此秋風が吹いて居るからと言つたのぢや。元來見送らるゝと言ふべきを却つて見送りのと言つたのは今送別をして居る其場合を廣く包括せしめたので、中七に於て送らるゝ人の心を現はし、又下五に至つて全體の光景を叙して居る。僅に十七字と雖も中々曲折のつくもので、初學者はよく心得て置くべき所ぢや。

曲翠亭夜寒

乳麵の下焚立つる夜寒かな

乳麵はうどんへ他の品を加へて煮て喰ふものゝ名。其れを作る可く今ま鍋の下を焚立てゝゐる、其時が恰かも夜寒を感じたといふので、

乳麵は温かいもの、それを夜寒の夜に作つてゐるといふのが理窟以外一種の趣味があり、又主客の交際の手輕な所も自ら言外に現れてゐる。

鹿嶋神前

此松の實生せし代や神の秋

鹿嶋神社の境内には大きな古い松があると見ゆる、此の一大老松の實から初めて生えた其時は何時頃であつたらうか、定めし古いく昔しの即ち神代の秋であつたらうか、神代よりの松が今斯様に生茂つてゐるのであらう、さても有難い神々しい此社の眺めである哩と言つたのぢや。

留別

送られつ送りつ果ては木曾の秋

旅立する時送る人々に言をのこすを留別といふので、芭蕉翁が旅に出やうとする時に人々に送られて其席上で作つた句であらう。自分は今ま人に送られてゐる。諸君は人を送つてゐる、個様に送られつ送りつした其果ては遂に木曾の秋に逢ふ我が身の上ぢや、今も淋しい秋であるが是れより行先は木曾山にわけ入りて、獨り嶮岨を辿りつゝ更に淋しい秋をする事であらうと、行末を思ひやりて興じ作つたのである。

○ さらてさへ秋よ野寺の一ツ鐘

さらてさへは左様でなくてさへもといふ意で、秋は悲しく淋しいもの、其上にも野寺で一ツ鐘が鳴り響いたので、愈以つて悲しく淋しい思ひをなしたといふだけの事。

種の濱にて

さひしきや須磨に勝たる濱の秋

種の濱といふ所、越前の敦賀より海上七里ばかりぢやと紀行に見えて居る。

如何にも淋しい事ぢや、須磨の秋は淋しいとせられてゐるが、それにも勝りて一層淋しい此濱の秋であるといふのぢや、此濱のけしきが須磨に似て居たものか。又勝とは繪合せの判などの心もあらう。

幻住庵にて

旅くせや寝ひえわすらふ秋の山

旅くせとは旅中では必ずしも衾等の設けももなく、ぞんざいに寝起きをした、其癖といふ位の事、其旅くせが今も残つて居て、兎角ぞんざいに寝起きをした結果又寝冷えを煩はつたわい、此秋の山中の庵で、と自ら歎じたのぢやが、其實は氣樂な生涯の吹聴。

小名木澤桐溪興行

秋にそふて行かはや末は小松川

小名木澤といふ所の桐溪といふ人の宅で俳句の興行があつてよむといふ前書。

折から暮秋で秋は去つて行く、其秋にそひ伴て行つて見よう、其行末は小松川邊りで面白い事であらうから、と言ふ意味である。想ふに小名木澤から小松川は西に當つてるので、天は東より西へ轉ずるといふ古説より秋も西へ行くものとして、自分も其方角へ共に行くと言つたのであらう。併し果して小松川が西方であるか否やは地理が分らぬから断定する事は出来ぬ、或は小名木川といふ川に沿ひて行く。と下流又は上流は小松川といふ名に成つてゐるので水の冷かさを秋と見て其川に沿ひて小松川の處まで行つたら面白い事だらうと、言

つたのかもしれない。兎角地理不案内では解し難い句ぢや。

旅懷

此秋は何て年よる雲に鳥

旅の心持を叙したといふ前書。

是迄秋には幾度か逢つて來てゐるが、此秋は又た何故に斯様に老い衰へるやうな心持がするのであらうか、アレあの處に鳥が飛んで雲に入りつゝあるよ、と斯様に感じを述べると共に折節の景物を附加はへたので、雲に鳥を見たから老いの至るを知つたといふ譯ではない、而かも其配合が餘り突然ではなく、老を感じる情に對して秋の雲に鳥の飛び入る淋しい景はよく調和してゐる。

車庸亭二句

秋の夜を打崩したる嘶かな

車庸亭にて秋の夜に大勢の人が集つて種々の談話をしてゐたものらしい。さうして話が遂に佳境に入りて、何か面白い事があつて一座ドツトごよめき渡つた。其のごよめきの爲め淋しい秋の夜を打崩してしまつて全く秋の夜らしくなくなつた、なか／＼の盛會であつた、とても言ふ様な事であらう。打崩したるは思ひ切つた言葉で面白い。あるじは夜遊ぶことを好みて朝寝せらるる々人なり宵寝はいやく朝起はせはし

おもしろき秋の朝寝や亭主ふり

これ亦た車庸亭に於ける句で、亭の主人は夜分に遊ぶ事がすきで長起をする、さうして朝寝をする人ぢや、宵寝をするのは卑しく思はれ又朝起をするのはせはしない、そこで、主人のやうなのは卑しからずせはしからず誠に結構な事ぢやといふ前書。想ふに宿つた翌朝芭蕉

翁は既に起出たのに主人は尙ほ寝てゐたので一寸斯様にからかつたのであらう。

如何にも面白い事ぢや秋の朝に長寝をしてゐる亭主ぶりは、客に構はぬ處が却つて客も心配がなく、よい亭主ぶりであるといふ位の事ぢや。

木因亭にて

死もせぬ旅寝の果よ秋のくれ

最早自分の如き老人は死んでもよいのぢや、それに未だ死にもせず旅より旅と歩行きまはつてゐる、其の果は又も秋のくれに逢つて淋しい思をするわい、と戯れたので、洒落な胸懷を叙した句ぢや。

いく秋のせまりて罌子に隠れけり

秋も末になり今しも秋が過ぎ行くといふ景を言つたので、秋も次第

次第にせまり其秋は遂に芥子粒のやうな小さいものに隠れてしまつたと理想的に叙し、尙一層誇張して音に此秋のみならんや毎年々々敷へ盡せぬ幾度の秋も皆な此芥子に隠れてしまふと云つたのである。蓋し佛説に須彌山が芥子の中に入るといふ事などがあるから、それ等を思ひよせた趣向であらう。

深川の庵

棹郎の尻聲寒し秋のくれ

深川の庵に居て、庵の外なる川を舟で往來する船頭の歌を聞き興じた句で、其の舟子のうたふ聲も初めは高く終りは寒げに消失せるやうな趣がある、此の秋の淋しき暮よといふので、嘗ては「ひいどなく尻聲かなし夜の鹿」と云ひ、今は棹郎の尻聲を捉へた、兎角尻聲を覗ふ親爺さんである。又た棹郎は音でタウラウと讀ませるのか、想

ふにせんごうと讀ませる積りなのであらう。

枯枝に鳥のこまりけり秋のくれ

枯れた枝に鳥が止つた此の暮に、ア、淋しい景色であるといふだけの事。

雲竹の像

こちらむけ我もさひしき秋のくれ

一本には前書があつて、雲竹の自畫で後しろ向きの法師をかけたものを示して、賛せよとあつたと、いつてある。そこで句意は此方をむけよ少し顔でも見せられい、自分も淋しく思つて佗びて居る此の秋の暮れであるから、左様に背中斗り見せずとも好いちやないかといふからかつた心持である。

所思

此道や行人なしに秋のくれ

或る道中で前後を眺めるのに、一人として行く人がない淋しい秋の暮のけしきぢや、といふが表面で、裏面には前書により自分と同じやうな生涯同じやうな心で同じ道を辿る者は廣い世界に一人もないア、已ぬる哉といったやうな心持をほのめかしてゐる。

行秋や身に引きまこふ三布蒲團

行秋の頃で既に身に寒さを感じた、其處で三布蒲團を寒さ防ぎに引きまこふたといふので、三布蒲團は普通のふとんより小さいもの、其小さい薄いのをまこふて、からく秋の寒さを凌ぐといふ佗人の境涯を叙したのである。

蛤の二見にわかれ行秋そ

前書がないが別本には伊勢の遷宮をふがまんとして出かけた時にとい

ふ事になつてゐるから其時の句と見える。二見と蛤は西行上人の歌にもあつて縁故のある配合物、且つや二見浦は海邊の事なれば貝類もあらうといふ所から、旁それを配合して、是から蛤のある二見へ諸君とわかれて行くのぢや、此行く秋の頃にと、離別の感情を叙したので、行く身と行秋とをかけ言葉にしたのである。尙二見は蛤の蓋と實とに通はせてあるといふ説もある。

内宮は事をさまりて外宮の遷宮をふがみ侍りて

たふこさに皆おしあひぬ御遷宮

内宮の御遷宮は既に其事がをさまりすんでしまつて外宮の方の遷宮を拜み奉つて咏じたといふ前書である。

尊く勿體なく思ふ所から人々皆な赫々とおつめかけて押しあひへしあひ、拜んでゐる御遷宮ぢやといふだけの事である。御遷宮は二十四

年目毎に行はれたので、いつも秋季に取行はれたから、單に御遷宮といへば即ち秋の季節になるのである、

行秋のなほたのもしや青蜜柑

行秋の頃にも尙ほ且つたのもしく思はれるアノ青い蜜柑よといふので、すべての物が枯れかゝつて寂しく荒れて居る景色の中に獨り蜜柑の青々としてゐる様は心丈夫に思はれるわけである。

芝柏亭にて

秋深き隣は何をする人そ

秋が深くて萬事物あはれに淋しい頃ぢや、さて此の隣に住むでゐる人は何をすする人であらうか、如何なる生業で此秋を如何様に過ごす人であらうかと言つたので、自分の獨りポツチで隣人すらも交際する事なく語らひ慰む由もないといふ心持を叙したのである。

清水の茶店に遊ぶ

松風の軒をめくりて秋くれぬ

清水は京都の清水観音である。松風が軒をめぐりつゝ吹て秋がくれたといふだけで、松風と云ひしは「松風の音羽の瀧の清水の」といふ二十三番札所の内の歌にある所より思ひついたのであらう。兎に角清水寺の實景らしい。

行秋や手をひろけたる栗のいか

秋が行くぢや、栗のいがを打見ると丁度人の手を廣げたやうにハジキ割れてゐると、唯だ其の節物を配合して詠じた丈ぢやが、尤も今迄は堅く手を握つてゐたのが忽ち開け廣げたのは何となく物を失つて淋しいやうな心持がするから栗の實を藉り擬人的に叙したのであらう。

冬の部

元祿辛酉初冬九月素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍ることは其頃は花
いまだめぐみもやらず菊花ひらく時_三到重陽といへる心
により且は展重陽のためしなきにしもあらず猶秋菊を
詠じて人々をすくめられける事になりぬ

菊の香や庭にきれたる履の底

元祿の辛酉の年の初冬即ち十月九日に素堂の菊園の遊といふ前書
で、それに序文を添へて、重陽即ち九月九日の宴會を神無月即ち十
月の九日に開くのは九月九日の其頃には菊の花が未だめぐみもしな
かつた、爲めに「菊花開時_三到重陽」といふ漢詩の心により、且つ昔

「延喜帝のを御忌を避けていつも十月に宴を行はれた展重陽」の例も
ないでないから、初冬であるが、尙ほ秋菊を題に吟詠して人々にもそ
れを勧められる事になつたのちや、この辯解。尤も「展重陽」はのべ
重陽とよむのか、まだ他によみ方があるか。
さて句に至つては、菊が薫つていゝ氣持に鼻を撲つ、其の菊のある
庭に切れ損じた履の底が捨てゝあるといふので、わびしき履などを
配合に持來つて主人が常に此間の消息を解する風流漢であることを
ほのめかした位の事であらう。

桐葉のぬし志淺からざりければ暫らくとごまらんさせ
しほごに

此海に草鞋すてん笠時雨

桐葉といふ人は身分でも尊い人だつたがぬしといふ尊稱を用ひてゐ

る。其人が自分を接遇するの優渥なるに感じた故暫く其人の許に留
らうと思ひ定めた、そこで此句を咏ずといふ前書である。
桐葉の家は海岸と見える。其海中へ向つて今迄穿いて居た草鞋を棄
てしまはう、折ふ笠に時雨のする淋しい時であるから、此上淋
しき旅をして草鞋など穿く氣がないといふので、尙裏面には御懇志
に甘まへて暫く御厄介になりませう、と主人に對する挨拶の心を含
むのであるのぢや。

道のはとりにて時雨にあひて

笠もなき我をしくるゝかこは何こ

笠も持たぬ自分ぢや、それを時雨るゝとはコハ又た心なき時雨ぢ
や、と一寸手軽く打興じたので、芭蕉翁の面目が躍如として現はれ
てゐる。且つ下五の言葉は暗に能狂言めかして居る。

草枕犬もしくるゝか夜の聲

旅中草を枕として寝てゐる、夜も更て犬の啼く聲がし、時雨がさらさ
らと降つてゐる。其處で我のみにあらで犬も今は時雨れてゐるのか
アノまア夜に於て啼く聲のわびしい事よと、人に同情を求めすに却
つて動物の犬に求めた所が他人の境界で、頗る草枕の心にもかなつ
てゐる。尤も實際野宿して草を枕としたのではなく、旅の宿りに、
夜ふけて時雨の音を聞き、犬の遠吠を聞いて作つたのであらう。

時雨ゆくや舟の帆綱に取つて

舟中に於ての句と見ゆる。時雨ゆくやは時雨の中を行きつゝあると
いふ意、舟の中で時雨乍ら行く淋しい所より唯だ立つて居れず舟の
帆綱にすがりついて居るといふので、心細い所が言外に溢れてゐる。
或いは時雨に風が添ひて舟の揺れた場合でもあるか。

鶏の聲に時雨ると牛屋かな

鶏の鳴聲がして、時雨が降つて居て、其處に牛小屋があるといつた丈で、鶏の聲がした爲めに時雨れる牛屋といふ意味ではない。此句専ら客觀を現はしたのであるが、調子の爲め、又言葉を接續せしむる爲め、斯くにの字を用ひたのに過ぎぬ。

人の許へはじめて行きて

初時雨初の字を我時雨哉

人の許へお初に行つたといふだけの前書。

今日は折ふし今年の初めての時雨ぢや、其の初時雨の初の字を我が今日の時雨と致さう、即ち今日は初時雨で初の對面ぢやと興じたので、暗に時雨を雅客出會の事に比して居る。

はやこなたへといふつゆのむくらのやとほうれたくと

も袖をかたしきておとまりあれや旅人

旅人ご我名よはれむ初時雨

前書は宿の主人が旅人を呼止る言葉になつて居て、早やこなたへといふ露ので、言ふと夕とをかけ、其の夕露のおりた葎の茂れる宿は物憂くあらうとも、袖を敷いてなりと御泊りあれや旅人よと言ふので、梅ヶ枝の謠の文句ぢや。春の部に於ける「毘沙門堂の花盛云々」を清水の櫻に引いたのと同例である。

句は旅の途中初時雨にあふた時の興で、旅のお人よと後から我名を呼ばれて見たいものぢや、此初時雨の物淋しきに、誰れか呼止めて宿する人は無からうか、彼の文句にあるやうな情ある人は居ぬであらうか、願くは左様な人に邂逅して、我も亦た謠曲中の人になつて見たいものぢやと言つたので、時に取つて一寸面白い興であるのみ

ならず、其場合の如何に淋しくなつかしき光景で又如何に翁が浮かれて居るかも想像されて好い感じかする。

一尾根は時雨ると雲か富士の雪

一尾根とは富士の峯の或一方で、其一尾根だけは雲がかうつてゐるが、其雲は時雨ると雲であらうか、他の方はいづれも雪が積みて白く眺められるといふので、一半は雪白く一半は雲のかうつた富士をあらはし、其時節が折ふし冬であつたから、其雲に時雨の想像を添へて一幅の畫圖を作つたのである。

伊賀山中

初時雨猿も小籠をほしけなり

伊賀の山中での作といふ前書。

初時雨が降つて皆な籠を着て行きつゝある、山中の猿も人を見て己

も小さい籠を欲しさうにしてゐると、時に取り興じたので、或いは山中の茶店に猿を飼つてゐるのを見て斯様に戯れたものか。

舊里の道すがら

時雨るとや田のあら株の黒むほご

芭蕉は伊賀の人であるから、舊里の道は伊賀へ行く道の意であらう。時雨ると事ぢや、其の爲めに田の新しい刈株も俄に黒く見える、斯程まで時雨ると事ぢや、といふので、若し五月雨のやうな長雨なれば刈株は腐る迄降るのであるが、一寸其色が黒むほごといつたのはよく時雨らしい處を捉へてゐる。

美濃垂井宿矩外が許に冬籠して

作り木の庭をいさめる時雨かな

美濃國垂井といふ驛の矩外の家で冬籠をして作つたといふ前書。

作り木は木に手を入れて枝ふりなど人工を加へた木で、其の木のあ
る庭を時雨がして其爲め庭が勇ましく思はれる、既に冬で寂びてゐ
るのを却つて時雨が勇ましく見せるといふので、多分常磐木の庭で
もあつて雨の爲め更に青々として見られたから、斯様に興じたので
もあらうか。

島田驛塚本が家に至る

宿かして名をなのらする時雨哉

島田驛は東海道の宿場、其地の塚本といふ家へ行つたといふ前書で、
折ふし時雨が降つてゐた宿をかしてくれて、さうしてお名前は何と
仰せられるぞと問ふた、それが一寸面白く思つたより斯く歌つたの
である。名をなのらする時雨哉とは名をなのらせた其場合に時雨が
降つて居たといふ文義である。

馬士はしらし時雨の大井川

大井川が滔々として流れてゐる、それに時雨が降つてゐる、其の景
色の趣と言つたら實に何とも言へない趣ぢやが、彼の馬方づれはど
ても此趣味を知る事は出来まいと言つたのである。併し馬方の趣味
を解せぬといふ反面には大井川の此時雨の中を無頓着に打叫びなど
して馬を牽いて過ぎつゝある荒くれ男も翁が詩中に入り來り、却て
一種の趣を添へたのである。

許六亭にて

けふはかり人も年これ初時雨

人の年をとるは心細い事ぢやが今日許りは人も年よつてくれかし、
此の初時雨に對しては却つて年よるこそ面白けれ、即ち年寄にして
始めて情味もあるぢやと戯れたに過ぎぬ。

新藁の出そめて早き時雨かな

既に稻を刈つて此頃既に新らしい藁が出初めた、如何にも早く出た事ぢやと感じた、其場合に時雨が降て居たから時雨哉と歌つたのである。尤も時雨と新藁は自然に配合も好い、想ふに路傍などに新藁が散らばつてそれに時雨してゐる處を見付けたのであらう。

山城へ井出の駕かる時雨かな

山城へ行く目的で、井出へ來て時雨に逢ひ、其の井出で駕をかりて時雨の中を山城へ行つたので、其山城といふ古い國と井出といふ名所と駕をかりた出來事と皆面白く感じたから斯様に叙じたものぢや。

草庵

人々を時雨れよ宿は寒くとも

人々が此草庵に集つてゐるが、其人々の上へ時雨れて皆な時雨化してしまつて貰いたい、よし此宿は寒くなつてもよいから、と云ので、其實は折角人々が集まつたけれども、宿には何の設けもない、責めては時雨でも降て風流な景色の御馳走でもしたいといふ意もある、

支梁亭にて

口切に堺の庭そなつかしき

支梁亭は江戸の深川である由。そこで口切の宴があつたと見ゆる。口切は十月に爐を開いて後ちに吉日を選び茶會を催し、其日に夏の新茶を藏め置た茶壺の口を切るので、冬季の人事になつてゐる。其の口切の會をする此場合に於て堺の庭がなつかしく思はれるといふたのぢや。堺の庭は利休や紹鷗の縁故の地ぢやさうな。

爐開や左官老ゆく鬢の霜